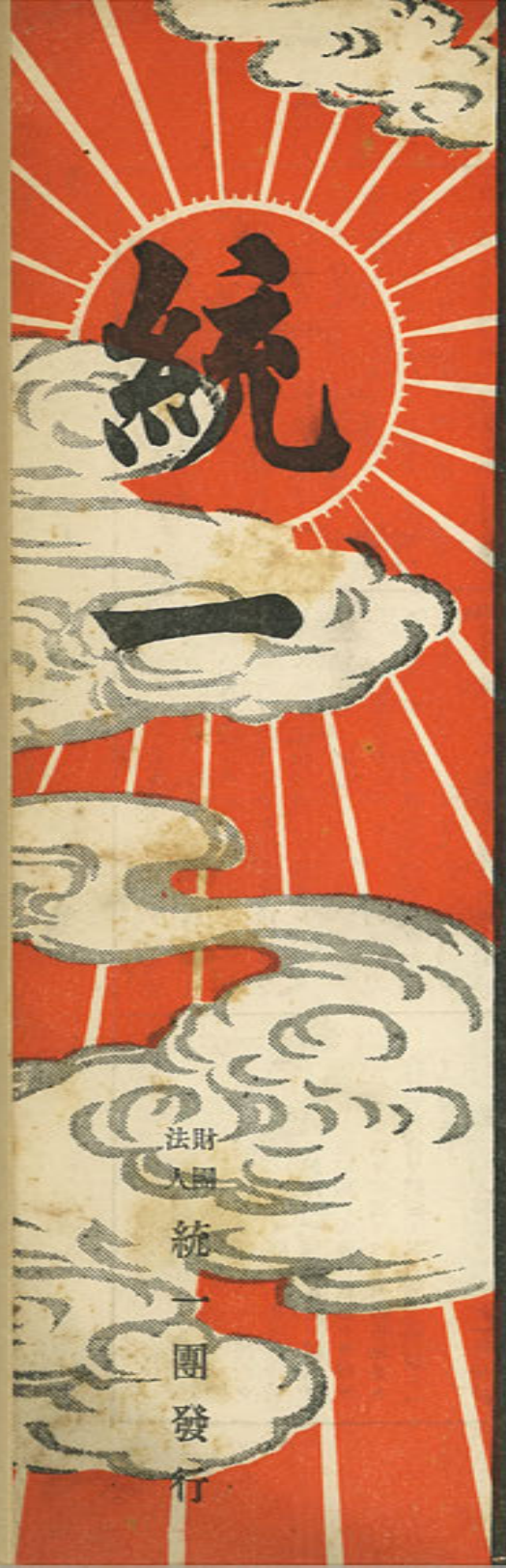

目次

佛教の根本と其の應用（其三）……本多日生
開目鈔講話（第二十二講）……小林一郎
眞の實在……橋本辰居
日蓮宗概觀（第十三）……梶木顯正
身延山御書の感激……笹木欣爾
時感……惜道居士
記事
○本部團報　○福島支部報　○團費誌料寄附金及維持費領收
大藏經要義續篇（其十二）……本多日生

第四十三年　八月號

13/11—20

財團法人 統一團趣旨

統一團ハ創立以來實ニ四十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正眼ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サヾル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ産出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法思國會等アリ其衆頭宜傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン　又著述出版ニ於テハ大藏經要義　法華經要義　日蓮主義精要　聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ終來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セント欲ス　其中心ノ事業ヲ擧グレバ

第一佛祖正眼ノ法統ヲ擁護スル事　第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事　第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事　第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事　第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ毎ニ覺醒ヲ促シツヽ嚴然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事是レナリ

教旨ノ正明　研學ノ潤達　活動ノ旺盛

此等ハ統一團ノ標語ナリ

茲ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼贊ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ　希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

本團署則

◎目的　本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ講明シテ佛祖正眼ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根抵ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌『統一』ヲ發行ス

◎維持員　本團ノ事業ヲ翼贊シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス

◎賛助員　一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ賛助員トス

◎正團員　一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ醵出セラル、方ヲ正團員トス

◎入團　御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス

◎誌友　統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

佛教の根本と其の應用（其三）

本多日生

四悉壇の攝化

そこでお釈迦様は、此の教といふものに付ては前にいふ第一義としての變らぬ所と同時に、直ぐに之を應用することを說かれた、それが『權實』卽ち方便と眞實といふ言葉であり、さうして權實相離れざる所に最も妙味が在る、權實不離、それを妙法と名付けるのである。權と實とが離れたり、權が實に敵したり、實が權を失つて繫りが無くなつたりするやうなものは皆不具で役に立たぬ。斯ういふ具合にお釈迦様自ら說かれて居るのでありますが、其應用の方面を分析するといふと『四悉檀』と申して四つの事に依つて教といふものは應用されたのである。

其の四つといふのは卽ち世界悉檀・爲人悉檀・對治悉檀・第一義悉檀と申して、此の事を釈迦如來は嚴重に教へられて居る。御自分が佛教を弘める場合ばかりではない、凡そ佛教を宣傳せんとする者の心得としては、此の四悉檀の事を能く心得なければならぬと言はれて居る。第一の『世界悉檀』といふのは、其の國家なり社會に於ける所の事情を考へることである、今日で言へば其の國の歴史、傳統的觀

念及び其の社會の風潮、現在の狀態、卽ち歷史的觀念と其の時代に動いて居る所の狀況とを觀察してそれに適合を圖つて敎を與へなければならぬといふことである。其の次の『爲人悉檀』といふのは其の社會全體の風潮の中に、又小別けをすると色々の人間がある、或は非常に深い學問をして居る人間もあるし、學問の足らぬ人間もある。或は道德上から進む人もあり、或は純粹の信念から來る人もある、色色そこに宗敎に來たる所の順序といふものがあるからして、其の各々の人間の機根といふものを見て、それに當嵌まるやうに敎は說かなければならぬ。非常に無學で、併ながら純潔な情操を以て佛敎に向つて居る人間に對して『抑々哲學とは……』といつて面倒な理窟を言つて、相對的とか、絕對的とか、無暗に的といふ字ばかり竝べて居つたならば、何を聽いても薩張り解るものではない。それかといつて又非常に思想上の研究を積んで居る人で、自分は基督敎の敎も研究して見たけれども餘りに獨斷的で面白くない。今後の宗敎といふものはどうしても理智と信念とが一致しなければならぬ、自分は哲學も學び西洋の色々の學問もやつたがどうも滿足が出來ない、佛敎に依つて此の理智と信仰とを併せ滿足せしむることが出來ると氣が附いたといふやうな所から、落着いて佛敎を研究しやうといふ人に對して、唯々『有難いナンマイダー〳〵』といふやうなことを言つたならば、さういふ人達は逃げて行つてしまふ。であるから其の人に對して適當したる敎化をしなければならぬ、是が爲人悉檀といふことである。左樣に時代に鑑み、個性に考へて、當嵌まるやうにのみやつたからといつて、それで敎の目的が達せられる

譯のものではない。時と場合に依れば其の時代なり個性なりに反對の態度を取つて、時代に弊害があれば時代の趨向といふものを擊破し、人心が頽廢し思想が惡化して社會が腐敗するといふならば、そんな社會に適合するといふことでなくして、それに逆行して其の弊害を擊破して敎といふものを正しく樹てて行かなければならぬ、個性といつても其の個性に非常な弊害があつて、それを矯めなければ信仰に入ることが出來ない、例へば非常な唯物主義になり墮落の生活に陷つて『ナーニ宗敎も道德もあつたものではない。人間は唯々食つたり飲んだり面白おかしく暮せば宜いのだ』といつて何處迄も突張る者の爲には、其の誤謬を擊破して正しく敎化をしなければならぬといふのが『對治悉檀』といふことである。

更に其の他にもう一つ根本の第一義といふものを抑へて行かなければならぬ、世界悉檀・爲人悉檀・對治悉檀の三つは卽ち其の時と人とに依つて應用宜しきを得るのであるが、第一義悉檀といふのはそれ等の應用の中心が眞實から離れないやうに注意をして行くのであつて、此の眞實と應用とが何時も懸離れない所に佛敎の價値があるのである。卽ち第一義の實と他の三つの權との間に、權實不離の關係に於て運用されて行く所に佛敎の價値があるのである、其の應用の伴はない佛敎は價値無きものであると謂はなければならぬ。其點が佛敎が他の學問などと異る所以であつて、卽ち宗敎たる所以である、根本を明にするとともに、直に應用を考へて敎が樹てられて居る點に貴い所があるのである。

斯ういふ思想から進んで行くが故に其の應用といふものは非常に敏活になつて來たのである。

尙ほ是は唯々釋迦牟尼が斯ういふ意味を說かれて居るばかりではない、佛敎の歷史に於て學者を代表する所の龍樹菩薩、天台大師といふやうな人が、矢張り同じく佛敎の應用に關して述べられて居る所を御紹介して置くならば、龍樹菩薩は大論の中に

法施とは經法に依附してひろく義理を作り爲に名字を立つ。

と書かれて居る、法を施すといふことは其の本はお經に依るのは言ふまでもないことだけれども、それからひろく義理をつくり、又其の義理に附ける名前を拵へて時代人心に能く諒解の行くやうにして行かなければならぬものである、根本はお經に基くけれども、お經からそれを開發してひろく義理をつくり、そこに色々の名前が起り新しき應用といふものが起つて來るのである。又天台は

經を通じ法を說くに時事に所宜を觀て義を作り名を立つるに何の失かあらん。

お經を弘め說法をするといふやうなことは、其の時代の推移を考へて佛敎の義理を新しい意味に發揚を試みて行くといふに何の差支があるものか、寧ろそれでなければ佛敎を擁護することは出來ない。尙ほもう一歩進んではつきり言ふて居る。

寧ろ株を守つて兎を待ち、必ず斯の責を貽すべけんや、且つ佛敎は究りなく、恒沙譬にあらず、東流の者萬の一にも達せず、智人君子希くは更に詮せよ。

佛敎は非常に廣いもので、印度に在つたといはれるお經の中にすらまだ支那に傳はりて來て居らぬものもあるのであるから、さう窺窟に考へてはいかぬ、根本が解つたならばそれからの應用といふものは餘程自在に進んでやれる譯である。何時も『株を守つて兎を待つ』で、一遍木の根株に兎が跳んで來て頭を打突けて死んだからといつて、網も掛けずに網も張らないで、唯々其の木の株の所につくねんと坐つて煙草を喫んで、又兎がやつて來て頭を打突けて死ぬだらうなどと思つて居たら、三年經つても五年經つても兎は一匹も來やしない、佛敎の坊さんが丁度それと相似たやうな暗愚なことをやつて居つたのでは此の敎に盡す所以ではない、時代の變遷を鑑みてそれに適應すべく運用をやらなければならぬと言つて居る。併しそれならばといつて無暗に輕率に出鱈目なことをやつてはいかぬから、能く落着いてお經の精神を調べ、先輩の意見の在る所を聞いて掛らなければならぬので、濫りに人を攻擊して『天台は無學である』とか『お經の中にも間違ひは澤山あるのだから……』といふやうな輕々しいことを言つてはならぬ。佛敎の學問は世間の唯々知識を覺えるだけの學問とは違ふのである、如來の聖敎を研究するのであるから、最も敬虔の態度を以て掛らなければならぬ、併ながら徒らにそれに恐怖の念を抱いてはいかぬ。縮み上つてしまつてはいかぬ、最も正しい尊敬の念と、さうしてそこに認められたものからは適當な應用を試みるといふ確信とを以て進まなければならぬ。卽ちチャランポランの奴もいかぬし、頑固々たる奴もいかぬのである。固陋を戒め輕佻を戒め、堂々たる道念の允許を受けてさうして如來の

聖教を時代の必要に適應すべく應用を試みる者、之を眞實の佛弟子といふべきであらうと思ふ。

斯樣に應用の方に於ても根本から教其のものを能く考へて、唯々應用が方便から方便の末を傳ふて弊害に陷ることのないやうにしなければならぬ。お地藏樣の涎掛も方便だ、お神籤を引いて癒が癒るといつて水を飲まして置くのも方便だといふやうに、そんな所まで無暗に方便を應用すべきものではない。方便といつても限度がある、眞實と離れたり、害毒を世に流すやうなことを以て方便の應用とは決して許されて居るものではない。さういふ方便應用に關して亂雜無法なる遣方の非なること、固陋にして應用を誤つて何時までも萎縮して居る弊害と、此の二つを脫却して行かなければならぬ。從來の多くの佛教徒が亂雜な方便應用をして佛教の價値を墜した、或は迷信といはれ墮落したる宗教の如く見られるやうなことになつた、一面に學問をする坊さんが何時までも蟲の喰つた頭を以て、様を守つて兎を待つやうなことをやつて居るといふことは、ともに如來に對して相濟まぬことぢやといふ自覺を以て、佛教の應用には先づ根本を抑へて應用を誤らぬやうにするといふことが、佛教徒の使命であり、日蓮門下の本領であるといふことを知つて居らなければならぬ、そこに吾々の使命があるのである。

斯樣な意味に於て私は佛教の根本と其の應用といふことを研究し、且つお話を進めたいと考へて居るのであります。

それに付て話を進めて行きたいことは、大體一切經といふものは阿含の教と、それに反對して起つて居る所の權大乘の教とそれから、阿含の教を活かして更に其の意味を明瞭にし眞實を徹底せしめたる法華經の教と、此の三つに分けて見るのが最も簡單なる見方である、唯々一概に阿含も法華も一切同じものぢやといつて、何等そこに中心を立てないのは、前に言ふ混同的佛教觀である、又法華經が一番良いからといつて總ての諸經を敵視するやうな頭で行くのは、是は分裂的佛教觀である。中心なき混同もいけないが、單り良い所を握つたからといつて他を蹴飛ばすやうな分裂觀もいかぬのであるから、法華經を透して一切經を疏通して行くといふことでなければならぬ。其の疏通の仕方は先づ阿含と、其の阿含に敵對したるお經との關係を疏通して行けば、そこに一切經が自然に綜合統一されて行くのである。故に飽までも阿含といふものを精密に研究する必要があるのであつて、先づ佛教の根本の事柄に關して、阿含がどんな具合に進んだかといふことに付てお話をして置きたい、さうして其の考をより明により深く完成したるものが即ち法華經であるといふことが之に依つて直ぐ分るのである。

宗教の二大要素

私の見る所では、佛教の根本の事柄に付て先づ第一に起ることは信仰である。同時に考へられるものが信仰の相手方となるものである、即ち宗教の二大要素は信念と其の信念の對境であります、其の事は阿含の中の增一阿含經の初にはつきり出て居ることである。

是れ諸法の本にして便ち一切の善法を出生す

是が一切佛教の根本であつて、是から一切の善い事が出て來るといふ、其の『是れ』と抑へたものは何であるか、それは即ち『心意清淨』と申して居るのである。心意といふのはこゝろばせであつて、『心』とはこゝろの未だ動かない場合を言ふのである、『喜怒哀樂の未だ發せざる之を中といふ』と中庸にあるが如くに、其の動かないものを『心』といふのである、『發して皆節に中る之を和といふ』と中庸に說かれた、其の心が動いて行く所が意即ちこゝろばせであつて、其の動き方が違損はないやうに行く所に心意清淨といふことが言はれるのである。即ち心意清淨とは中庸に謂ふ所の『中和』である、『中は天下の大本なり、和は天下の達道なり、中和を致して天地位し萬物育す』と聖人の言つて居ることも、今佛教が『諸惡作すこと莫れ、衆善は奉行せよ、自ら其の意を淨くす、是れ諸佛の教なり』といつて、心意清淨といふ事が諸法の本であり、是が一切善法の本であると說かれたことも全く同じことであると思ふのである。それ故に佛教の根本と申しても別に外に在るものではない。今法を聽かれつゝある諸君自身の其の聽きつゝある心、それが清い意味に正しい意味に働いて行くやうにといふことが佛教の根本問題である、それを除いては佛教は無い。人々の持つて居る心が正しい意味に、清き意味に働くやうにして行つて、さうして惡いことをしないやうに、善い事をするやうにしたいものだといふことが、即ち佛教の根本法であるのであります。

それがどうして一切の本を爲すかといへば即ち『阿含』と申して、阿含とは『教の本』と譯するのであるが、其の教の根本は今申す心意清淨であるが、それより現はれて出る所のものを三十七道品と申して居るのである、それよりして四阿含經、阿含二千卷の諸經悉く出生し、其の四阿含の教を弘くし、其の意味を充實する時、一切經といふものがあるのであるから、増一阿含經には

増一阿含は三十七道品の教を出す、及び諸法は皆此れに由つて生ず

と申して居るのである。四阿含經の澤山の教は今掲げた『心意清淨』の一句の中に盡きて居る、佛の教も、辟支佛の教も、聲聞の教も、三乘の教は悉く此一句の中に備はつて居るのである。さうして教は必ず戒を持たなければならぬ。戒は惡い事をしないやうに、善き事をするやうにといふ、其の實際行爲を支配する所に教の價値を生じて來るのである。心には邪なる事を考へず、行には誤つたる事をしないといふことが教の存する所以である。

斯樣に申して先づ人々の心の清いこと其の行の清いことを根本として居るのでありますが、然らば其の清い心の相手になるものは何かといふと即ち之を『本尊』と申すのであります、佛教の言葉では『信境』ともいふ『境』といふ字は宗教學で申せば信仰の對象であります、それが即ち佛樣であります。色色お經の一句を取つたり、お經の全體を取つたり、或は菩薩を取つたり、他の佛を取つたりするけれども、阿含の場合には其の信仰の對象は釋迦牟尼佛が中心であることは論の無いことである、其のことは今の増一阿含經の中に

當に一法を修行すべし。

といはれて居る。一つの法とあるが斯ういふ場合の『法』といふことは何も外のものではない、卽ち佛樣を有難く考へることを法といふて居るのである。であるから一法を修行せよといふことは所謂佛を念ずるなりと申されて居る。其の佛樣を有難く思ふことが一切の本であることを說かれて居るのである。其の佛樣を有難く考へる所から進んで

之何となれば、佛を念ずれば便ち名譽あり、大果報を成じて諸善普く至り、甘露味を得て無爲處に至る。

と說かれて、佛樣を有難く思ふことに於て色々の善き事が行はれるやうになり、さうして甘露味を得てといふのは洵に好い氣分になつて何とも言へぬ、宗敎の法悅歡喜に浴して、それから諸々の善事が出來るやうになり萬事が進んで行くのである。さうして一切經といつても皆是は一人の釋迦如來の說かれたものであるから、釋迦如來に依つて其の敎の精神を聞かなければならない、釋迦如來の思召を離れて佛敎を見やうといふやうなことは間違つたことである。所が其の釋迦如來の敎はどうかといへば、先づ身を正しうし、こゝろばせを正しうし。行儀宜く坐つて好い氣分になつて、さうして繫念在前といつて何時でも釋迦如來の前に自分が坐つて居るやうな心持になつて、專ら佛を念じ、如來の御相の美しいことを考へ、目も離さないやうに渴仰して如來の御功德を念じ、如來は金剛の體にして滅し給はず、廣大の力を持たれて居る、如何なるものにも打勝ち給ふ所の勇ましき方であるといふやうに、次から次へと佛樣の有難いことを考へて行けば、一點の疵なき瑠璃の璧の如く完全なる德を御備へなされて居ることに想到つて、轉た釋迦如來の有難さに感激をする、此の一つの精神、是が佛敎の根本であるといふことを、增一阿含經には詳しく說かれて居るのである。

前に言ふ所の自分の心を清くするといふことゝ、釋迦如來の有難いことを次から次へと色々の側から考へて行くこと、其の佛を仰ぎ佛に感激する精神、其中から衆善普く至りで諸々の善い事が生れて來る。心を清くする中から諸法諸善悉く生れて來ると言つたのは、向ふの對象に付て考へればお釋迦樣を有難く思ふといふことになるのであるが、併し省みて自分を考へれば己の心を清くし、正しくするといふことが佛敎の根本義であるといふことは洵に明瞭である。

此の事を法華經に於ては徹底的に說いて、一念信の中に一切のことは成就すると隨喜功德品に說かれて居る、心を清淨にするといふことは無論のことで、六根清淨といふことは、法華經の法師功德品に說かれて居るのみでなく、結經たる觀普賢經に於て六根清淨心意清淨といふことを說かれて居る。六根に分けるから六つであるけれども、心にすれば一つの心である、耳を清くし眼を清くするといつても、それは皆心の一つの窓に過ぎない、六つに分けるから六根になるけれども、本へ戻せば意根清淨の一つである、自ら其の心を清くするといふこと是れ卽ち六根清淨の本である、口ばかり奇麗にし眼

ばかり奇麗にして見た所が、心に亂想があれば何にもならぬことである。であるからそれを法華經に於ては『淨心信敬』と說かれた、淸き心、それは卽ち自分に取つての信心である。併しそれは宗敎の信心であるから唯々自分が淸いといふだけでは足りない、此の淸き心を以て信敬する所の相手がなくてはならぬ、其相手は法華經の壽量品に說かれた釋迦牟尼佛に於て絕對を說明せられたのである、是がどうしても統一的に佛敎を見ないと、唯々お釋迦樣は有難いと考へてさへ居れば宜いといつて居つてはいけない、阿彌陀樣が出て來たり大日如來が出て來たりすることになると、お釋迦樣よりも偉い佛かの如き惑を起さんとするのである。小乘阿含の敎は、お釋迦樣さへ見て居ればどんな佛が顏を出して來ても、それは皆お釋迦樣の一つの働きに過ぎない、水に寫る月の影の如きものであつて、釋尊は其の根本の一つの月である。絕對であるといふことで、釋尊に對する信念は決して動搖をしないのである。其のお釋迦樣の有難い意味を本當に徹底せしめて吾々の信仰意識を明瞭にして、一念隨喜の功德は五波羅密の行に超え、五十轉展は斯の如き功德があるといふことを法華經に於て詳しく說かれた。此淸き心を以て本佛釋迦如來を信念し奉る所に諸々の善根功德は發生し、一切の功德を成就し、現世安穩、後生善處、諸願滿足、所謂宗敎の目的は悉く此の一つに依つて完成を遂げるといふことを敎へた、是が佛敎の根本である。

其の根本を抑へて、而して此の應用を最も良く適切にしたるものが卽ち法華經である、又お經の側から眺めて阿含經の敎、又法華經の敎が其の應用を最も良く纏めて說明して居るといふことを、進んで次講に於てお話申上げやうと思ふ。

開目鈔講話

（第二十二講）

小林一郎

前講には、お釋迦樣が本當に御自分のお心持をお說きになつたのは、法華經の本門に至つてはじめてこれが現はれるのであるといふことを說かれた所でありました。その後を承けまして、勿論お經の中でもいろ〳〵佛樣が現はれて、いろ〳〵敎をお說きになるといふ、その有難い事は華嚴經以來ズツト續いて居るけれども、これを法華經に比べるとまだ〳〵本當に深いものではないといふことを、これから說かれるのであります。

華嚴經の蓮華藏世界は、十方此土の報佛各各に國國にして、彼の界の佛此土に來て分身となのらず、此界の佛彼の界へゆかず、但法慧等の大菩薩のみ互に來會せり。大日經、金剛頂經等の八葉九尊三十七尊等、大日如來の化身とはみゆれども、其化身三身圓滿の古佛にあらず。大品經の千佛、阿彌陀經の六方の諸佛、いまだ來集の佛にあらず、大集經の來集の佛又分身ならず。金光明經の四方の四佛は化身なり。總じて一切經の中に、各修各行の三身圓滿の諸佛を集て、我分身とはとかれず。

華嚴經を讀んで見ますと、お釈迦様が教をお説きになりました時に、十方の世界にそれ〳〵佛が現はれたといふことが書いてあります。この娑婆世界でお釈迦様が教をお説きになつた時に、十方の世界の他の何處の世界にも佛が見えた、斯ういふ事が華嚴經の中にあります。『蓮華藏世界』といふのは、蓮の華といふものを佛若くは菩薩の境界に譬へたのであります。それは今までにも度々出て參りました事であります。蓮の華といふものは泥の汚い中に根があつて、その汚い中から莖が出て、その上の方に淨らかな華が咲く、この華には泥も何も附いて居ない淘に淨らかなものである。佛が教をお説きになるといふことは、やはりさういふお心持で、佛様御自身は淨らかな、世間のいろ〳〵な罪や穢れを少しも受つけられない位な淨らかな方である。しかしながらその佛が教をお説きになる時には、チョウド蓮の華の淨らかなのが泥の中に根を有つて居ると同じやうに、この迷つて居る人間を見捨てられないで、この迷つて居る人間に救ひを與へ、教を與へる爲に、佛様は世の中に御出現になつた、斯ういふことになつて居るのであります。隨て佛の化導といふものを蓮の華に譬へることは、いろ〳〵なお經の中に何處にも現はれて居ることであります。華嚴經の中にもそれを説かれて蓮華藏世界といふ。佛様が世の中に出て教をお説きになるのは、チョウド蓮の華が泥の中から水面に現はれたと同じだ、斯ういふので蓮華藏世界といふ言葉が用ひられて居るのであります。

それでお釈迦様が世の中に出て教をお説きになる時に、十方の世界に佛様が現はれたといふことは、要するに『諸佛道を同じうする』といふ心持を現はしたものであります。佛様といふものは皆絶對の理をお覺りになつた方である。だからどんなに佛様が澤山あつても、その佛様のお心持は大體同じである。隨てその佛様が教をお説きになる、その御趣意

も大體同じだといふのが、諸佛道を同じうするといふことであります。その『諸佛同道』といふことを現はす爲に、お釈迦様が教をお説きになる時には、十方の世界に佛が自ら現はれる、斯ういふことなので、そこは或る程度まで法華經と一致して居るのであります。

その佛様は十方の國々に於て姿をお現はしになる、そこは宜しいけれども、お釈迦様のお力が十方の世界に及んで、十方世界の佛の教となつたといふ事までは、華嚴經では言つて居ないのです。これはたゞ十方の世界の佛の趣意が一致して居るといふことだけなら、華嚴經でも言つて居るのでありますが、その十方の佛といふものの根本は何であるか。これは法華經の壽量品に至つてはじめて久遠の本佛といふことを説き現はされた、佛様の根本は一つである、その一つの佛様が十方の世界に現はれていろいろな佛様にお成りになつた。それがこの娑婆世界即ち吾々の生きて居る世の中を救ふ爲に、さういふ佛様が現はれて來られた時には、それが釈迦牟尼佛である、斯ういふことになつて居るのであります が、そこまでは華嚴經では説いてありません。たゞ華嚴經に於ては、十方の世界に佛が現はれて、諸佛の教は結局一つになるといふことだけであります。であるから『此界の佛彼の界へゆかず』で、この娑婆世界の佛様が他の佛様と全く一致するといふことは言つてない。たゞその説かれて居る教が大體に於て一致するといふに止つて居るのであります。

たゞ華嚴經の中に、他の界の菩薩、即ち法慧といふやうな菩薩がこの世界へ來て居るといふだけであつて、本當に娑婆世界の吾々の生活と十方の世界の生活とが、根本に於て全く一致して居るといふことはまだ説かれて居ないのであります。

それから大日經、金剛頂經といふやうな經典の中では、八葉、九尊、三十七尊といふやうなことが

説かれて居る。これは蓮の華に譬へて、蓮の華の中心が一つあつて、それに花弁が八つ出て居る。この八といふことは印度に於ては、四とか八とかいふ數が物の全體といふ意味になるのであります。ですから必ずしも八には限らない、總てといふ意味です。そこで中央に大日如來といふ佛様が居られて、その大日如來のお力が八葉、即ち有ゆる方面に現はれてそれ〴〵の佛の教になつた、斯ういふ事を言つてある。それが先づ大日經或は金剛頂經といふやうな、眞言の方の經典に現はれて居る大體の趣意です。それから九尊といふのは、今申した八方に各々佛様があつて、中央にも佛様が居られるからこれを併せると九つになる。それから三十七尊といふのは、八に或る數を掛けると、例へば四を掛れば三十二になります。又四方と中央とを併せると五になります。これを併せると三十七尊といふことになる。これ等は皆やはり總てに行渡るといふ意味であります。總てに行渡つた尊い佛様、或は菩薩といふものをいろ〴〵の數を以て算へてあるので、その有ゆる方面に出現された佛とか菩薩とかいふものは、大日如來が身を分つて現はされたといふことになつて居るけれども、その大日如來そのものが、法華經の壽量品にあるやうに、久遠の遠い昔からの佛だといふことはハッキリ言つて居ないのです。だからその根本が永遠の生命があるかないかといふことは判らないから、それの現はれた佛とか菩薩とかいふものでも、本當に永遠のものであるかどうかといふことは判らない。何と言つても法華經の壽量品まで來ないと、有ゆる佛や菩薩の出て來る根本は判らない、斯ういふことになるのであります。『古佛』といふのは古からある佛、永遠にある佛といふやうな意味で、さういふ佛はまだ〴〵現はれて來ないといふのです。

それから大品經、これは大般若經といふことを別の言葉で大品經と申すのでありますが、その中にも、この娑婆世界に於てお釈迦様が教をお説きになつた時に、千佛といふ澤山の佛が其處に現はれて、お釈迦様の教の眞實だといふことの證明をしたといふことがあります。

又阿彌陀經の中には、お釈迦様が阿彌陀様の尊いことをお説きになつた時に、六方の世界のいろ〴〵な佛が各々現はれて、この説法の尊いことの證人になつたといふことがあります。しかしながら『これは『いまだ來集の佛にあらず』方々の佛様がそれぞれ價値のあるといふことは判つたけれども、法華經の中にあるやうに、この娑婆世界に總ての佛様が集つて來られた、總ての世界の菩薩が集つて來られたといふことは、どの經にもないので、それは法華經だけに限るのである。お釈迦様が教をお説きになつた時に、十方の世界の佛が皆集つた、又十方の世界の菩薩が皆集つて來られたといふことは、これは法華經だけに限るのであります。何故娑婆世界に釈迦様が出られて教を説かれた時に、十方の世界の佛や菩薩が皆集つたか、その趣意を考へて見ると、何が尊いといつても、難を冒して眞實の道を貫くといふほど尊いことはない。樂な時なら誰でも出來る、難かしい時にはなか〴〵出來ない。その難かしい所を冒して眞實の道を貫いてこそ、はじめて眞實の道の價値が發揮されるといふことであります。それで十方の世界に於ていろ〴〵な佛様が御出現になつたらうけれども、この娑婆世界の吾々の住んで居る世界といふものは、實に複雜な、實に面倒な、何といつても始末に了へないやうな世界ですから、この難かしい世界に出て教をお説き下さつて、この複雜極まる人生をだん〴〵善い世の中にして行つて、結局此處に極樂淨土が實現されるといふ所までを見越して教をお説きになる、これ程尊い事はない。斯うなつて初めて、佛の廣大無邊なるお慈悲といふも

のが現はれる譯であります。

であります從て法華經に於ては、この娑婆世界に現はれて教をお說きになるといふことが一番尊い。この骨の折れる事をなさるから、十方の世界にどれほど佛があつても、その佛が皆娑婆世界に對して掌を合せて拜んで、あゝ釋迦牟尼佛のお骨折は洵に有難い、よくそれだけの事をして下さつたと言つて皆が感謝し、皆がこれを賞讃したといふことになるのであります。それは法華經以外の經典に於ては、まだまださういふ所まで現はれて居ないといふのであります。

その他、金光明經の中に、四方のいろ〳〵の佛が現はれたとかいふやうなこともあるけれども、それは要するに化身であつて、その世界々々の要求に應じて現はれた佛樣といふより外はない。

要するにどの經を讀んで見ても、その經の中に、各々の世界に於て、各々修行して世の中をお救ひになるといふ佛樣はあるけれども、その佛樣が皆『我が分身』即ち壽量品に現はれた一つの本佛の身を分けて現はれたものに外ならぬのだといふことは、法華經以外の經典の中には說かれて居ない。それを說かれるといふことになつて、はじめて本當の一切の宗教、一切の信仰の統一が出來る譯であります。だから法華經といふものが一番尊いといふのであります。

この事に就ては、天台大師が御出現になつて以後

絕待妙
相待妙

斯ういふ區別が立つて居ります。相待妙といふのは、他のものに比べて佛樣が一番偉いといふことで相對して、相待つて、他のものと比べて見てどれが一番勝れて居るかといふと、四十餘年間には眞實の事を仰しやらないで、四十餘年の說法を終つて後に、正直に方便を捨てゝ無上道を說くと仰しやつたのであるから、さういふ點から申すと有ゆる經典と法華經とを比べて見て、法華經が他に勝れて居る。斯ういふ意味で、これは先づ一應の說明であります。ところがモット深入りして考へて見ると、法華經の精神が解れば、この法華經の信仰に到達すべき一切の教といふものが皆價値を有つて來る。それが絕待妙といふことであります。この法華經といふものが解つてからモウ一遍見直すと、小乘の經でも大乘の經でも皆價値がある、皆この最後の覺りに來るまでに役に立つて居るのであるから、その究極の所が判つて見ると、其處に到達するまでの努力といふものは皆それ〳〵價値がある。斯ういふのが絕待妙であります、一切の教といふものは、結局眞實の教に到達する爲の役に立つて居るのだといふこと、それが絕對妙であります。

何時もさういふ風に考へなければいけないので、例へば梯子段を上ると考へませう。先づ一段を上つて、次に二段目に上るのです、さうしてだん〳〵に梯子段の一番上まで上るのです、ですから一番上まで上らなければ、途中まで上つたことは無意味ではありませんが、何の爲に上つたのか判らない。一段目を踏んだのは二段目へ行く爲である、二段目を踏んだのは三段目へ行く爲である……それでズット行くのです。だから一番上まで行つて見ると、この梯子段の一段、二段、三段……と歩いたのは皆役に立つて居る。それを一番上に行かないで梯子の途中で止つてしまつたら、何の爲に梯子段を上つたかわからないことになる譯であります。ですから吾々は本當の佛樣のお心持をシッカリと捉へるといふことが必要であつて、さうなつてはじめて一つ〳〵の修行が皆役に立つて行くのであります。しかしながら梯子段の途中を通らないで、イキナリ一番上に飛上る譯には行かない、ですから上に行かうと思つたら、やはり梯子段の一つ〳〵を通つて行くより外ないの

です。それをイキナリ二階まで飛上らうと思ふならば、途中で落ちて腰を碎いてしまふより外ない。そのやうに絶對の佛の境界を重んずるといふことを考へると共に、其處へ到達するには一歩々々の堅實なる修行をするより外ない。斯ういふ事を考へなければならんのであります。高い理想を立てゝ、その理想の狀態に到達する爲には、低い日々の行ひを一つ一つ勵んで行かなければならん、斯ういふことになります。そこまでスッカリ說かれたといふことは、法華經壽量品を根本として行くのだから、それが判らなければ、一切の說法といふものは本當の價値を有つといふ譯に行かない。斯ういふのであります。

これ壽量品の遠序なり。始成四十餘年の釋尊、一劫十劫等已前の諸佛を集て分身ととかる。さすが平等意趣にもにず、をびたゞしくおどろかし、又始成の佛ならば所化十方に充滿すべからざれば、分身の德は備りたりとも示現してえきなし。天台云く、分身既に多し。當に知るべし成佛の久しきことを等云云。大會のおどろきし意をかゝれたり。

そこで即ち壽量品の遠序である。壽量品を說かれるその準備的のものである。壽量品を中心として考へて見ると、佛樣即ちお釋迦樣は、たゞ印度の國にお生れになつたお釋迦樣だけではないので、久遠の遠い生命を有つて居らつしやる。その佛樣が釋迦牟尼佛となつて世の中に現はれたといふことになるのですから、そこではじめて十方の世界の有ゆる佛でも、有ゆる菩薩でも、皆それが一つの大きな力の現はれだと考へられるのであります。

その事を天台大師が說明されまして、これは『法華玄義』といふ書物の中にあることでありますが、

分身已に多し、當に知るべし成佛の久しきことを。

と言つてあります。十方世界から澤山の佛がお集りになつた、その佛樣は皆壽量品にあるところの本佛といふものゝ身を分つて現はれたものに外ならぬ。その十方世界の集つた佛樣が多いといふことは、中心を成す絶對の佛樣のお力が無限であるといふことの證據になるといふのであります。それは靈鷲山に於て集つた大勢の集まり、即ち大會の人々が、心の底から本佛といふ根本の佛樣の有難いことに歸依した、恐入つてしまつたといふことをそこに現はして居るのだといふのであります。

其上に地涌千界の大菩薩大地より出來せり。釋尊に第一の御弟子とおぼしき普賢文殊等にもにるべくもなし。華嚴、方等、般若、法華經の寶塔品に來集せる大菩薩大日經等の金剛薩埵等の十六の大菩薩なんども、此菩薩に對當すれば、獼猴の群る中に帝釋の來り給がごとし。山人に月卿等のまじはるにことならず。補處の彌勒猶迷惑せり。何に況んや其已下をや。此千世界の大菩薩の中に四人の大聖ましまます。所謂上行、無邊行、淨行、安立行なり。

そこではじめて上行、無邊行等の菩薩、地面から現はれて來られたといふことの意味が本當に判るのであります。

その大地から涌出した上行、無邊行といふやうな菩薩は、佛の敎といふものが三十年や五十年已來で

はないのだ、この世界の始つて以來度々佛樣が出て教をお說きになつた。又然るべき時には御出現になつて教を說く、その教をお說きになるといふことがだん〳〵重つて行つて、結局印度にお釋迦樣が御出現になつたといふことを現はして居るのであります。それを現はされるから、上行、無邊行といふ菩薩こそは佛樣の根本のお弟子である。その根本のお弟子であるところの上行、無邊行等の菩薩が末法の世に現はれて、法華經を初めて世の中にお弘めになるといふのであります。

斯う考へて見ると、末法の世の中の暮しにくい、生きにくい、骨の折れる時代に現はれて、正しい信仰を持つといふことの有難さが泌々と感ぜられる譯であります。世の中が苦しくなつて、世の中が難かしくなつていよ〳〵堪らぬといふ時に、はじめて人間の本當の覺りが得られるのであります。さういふ時に生れ合せた吾々がウッカリしたら、佛樣も菩薩もお經も知らないで、だん〳〵世の中のさういふ風潮に流されてしまつて、どこまで墮落するか判らない。その時代に、どういふ有難いことであるか、吾吾はこの佛の教を學ぶことを知つた。佛の教の中に於ても、佛が魂を籠めてお說きになつた妙法蓮華經を、假にも讀誦し、假にもこれを信ずることの出來たといふことは、再び得ることの出來ない有難い機會だと思はなければならないのであります。であります從つて斯ういふ得難い機會を得た今、吾々が怠けてどうするか。これから後再び斯ういふ機會は得られないかも知れないではないか、シッカリやらなければならぬといふことが考へられるのであります。中々緣といふものがないと、吾々は尊い教に近づくことは出來ないのでありますから、こんな有難い機會があつて緣を與へられた、この緣を空しくしたらどうなるか、再びこんな機會は來ないかも知れぬといふぐらゐに思ひ定めて、信仰を勵んで行かなければならぬ譯であります。

さういふ事に比べて見れば、他の諸經、即ち華嚴經とか、方等經とか、般若經とか、或は大日經とかいふやうな經の中に說かれた事はまだ〳〵淺いものである法華經の本門を考へて見て、はじめて他の教の淺いといふことが考へられる。チョウド猿が群つた中に帝釋天が出て來られたやうなものである。又椎などして居る賤しい人間の中に、月卿といふ京都のお公卿樣のやうな上品な方が來られたやうなものである。今までの教はまだ〳〵徹底して居ないのであるが、その徹底して居ない教の結局、本當の佛樣のお心持を打明けられたといふことは大變尊い事である。さうしてその佛教の教を永久に傳へる爲に、上行、無邊行等の菩薩が其處に集つたといふことであります。

この上行、無邊行といふのは四菩薩と言ひまして、上行、無邊行、淨行、安立行といふ四つの菩薩のお名前があるのでありますが、この言葉に依つて吾々の信仰を勵んで行く大體の道がハッキリ示されて居るのであります。それは『四弘誓願』といふものがありまして、苟も佛の大乘の教を信仰する以上は、四つの誓願をしなければならんといふことが言つてある。その四弘誓願が四菩薩のお名前にピッタリ合ふのです。

上行——佛道無上誓願成
無邊行——法門無盡誓願知
淨行——煩惱無數誓願斷
安立行——衆生無邊誓願度

たゞこれは順序が逆になりまして、四弘誓願の方は、衆生無邊誓願度から始つて佛道無上誓願成に終るのでありますが、四菩薩の名前にすると上行から始つて安立行に終る。これは立場が違ふから逆になつて居るので、四菩薩の方は佛樣の立場から吾々衆生を御覽になつたその順序です、四弘誓願は吾々

衆生が修行して行くその順序です。だからこれが逆になる。片方は佛様の方から見下して居られる。一方は吾々の方から見上げて行かうといふのですから、同じ事ですが、上から見るか下から見るかの違ひで、斯うなるのであります。吾々の方から言へば先づ『衆生無邊誓願度』が始まりで、人間といふものは限りなくあるのだが、それが皆苦んで惱んで困つて居るのだから、何とかしてこの數限りないところの大勢の人間を度したい。度すといふのは苦しみや惱みの中から救ひ上げたい、斯う思ふ。それが衆生無邊誓願度といふことです。私共は世の中に立つて何時でも自分が信仰をして行くのに、たゞ自分一人のことだと思つてはならない。自分一人は言ふに足らん者ですけれども、衆生無邊誓願度であつて、大勢の人間が皆迷つて居るのだから、何とかしてこの惱み苦んで居る者を樂にしてやりたいナと思ふ。それが根本です　しかしながら一切の人を救ひたいと思へば、自分の迷を除くといふことを主にしなければならない譯です。人を救はうといつても、自分が迷つて居つて人を救ふことの出來るものではない。自分が毎日の生活の意味が判らないで、人に教を與へることの出來るものではない。だから衆生を皆救ひたいと思ふならば、自分の心の煩惱を無くしよう。斯う考へなければならない。自分が迷に滿されて居る心持で、どうして人を救ふことが出來るか、だから衆生無邊誓願度といふことを考へれば、どうしてもその次の『煩惱無數誓願斷』となる。人を救ふ爲には自分の心の迷を除かなければならぬ。斯うなつて行くのです。しかしながら自分の心の迷を除かうといふのにはどうしたらいゝかといへば、いくら自分で坐つて考へても吾々の思慮分別は限りがある。何十年、何百年考へても碌な分別はつきはしない。そこで『法門無盡誓願知』佛の教といふものを一つ學ばうではないか、どうぞ佛様の教を學んで、この教の根本を捉へて、それで以て自分の煩惱を除いて行くより仕方がない。吾々凡夫が自分の分別だけでやつては到底駄目だらう、一つ教を學ばうといふことになつて行くのであります。

しかしながらこゝに大問題にぶつかつてしまふ。何故なら、佛の教を皆知らうなどといつてそんな事が出來るか、お釈迦様が五十年の間お説きになつた教といふものは、相手もいろ〳〵ある。王様もあれば、乞食もあれば、子供もあれば百歳の老人もある。それ〴〵聽く人の機根に應じて皆適切な教をお説きになつたのだから、お釈迦様の御一代の教といふものは實に廣大無邊なものである。その廣大無邊な教を皆知らうと言つても出來るものではない、少しばかり習つて居る間に自分の方が死んでしまふ。だからこれは言ふべくして行ふべからざるものではないかといふことも考へられる。この問題を解決されたのが、日蓮上人がこの開目鈔の後の方に言はれて居る言葉で、

一滴をなめて大海の潮をしり、一華を見て春を推せよ。

といふことであります。海の水は皆鹹いのだから、日本の近邊の海の水を手に掬つて飲んで見て鹹かつたら、世界中の海の水が鹹いといふことを知つたら宜いではないか。アメリカへ行つて、ヨーロッパへ行つて、アフリカへ行つて、方々の水を皆飲んで見てはじめて『あゝ海の水は鹹いナ』……そんなことをする必要はない。海の水は皆共通だから、日本の近邊の一滴の海水を嘗めて見て鹹いと思つたら、それに依つて世界中の海の水が鹹いといふことを知つたら宜しい。又春の初に梅の花が一輪咲いたら、ああモウ春になつたナ、これから櫻も咲くだらう、桃も咲くだらうといふ風に、梅の花が一輪咲いたのを

見て春になつたといふことを知つたら宜しい。それを梅の花が咲いたとけでは判らない。桃の花が咲いても判らない。櫻の花が咲いても判らない、花を皆見てしまつてから『あゝ春になつたナ』と思ふ内にはモウ夏になつてしまふ、それではいけない。だから佛様のお心持の根本を捉へさへすれば、有ゆる經典を讀まないでも、有ゆる經典を讀んだと同じことだといふのです。それが解つてはじめて法門無盡誓願知といふことが出來ます。佛様のお心持の根本を捉へればいゝ、それを以て推して行けば、他の經典は讀んでも讀まないでも、結局この根本の教に依つて統一されるといふことになる。それで大勢の人を救はうとすれば煩惱を除かなければならぬ。煩惱を除かうとすれば法門を皆辨へなければならぬ。

法門を辨へてどうなるかといへば『佛道無上誓願成』で、佛様といふものはこの上もなく尊いものであるけれども、どうぞ自分達も永い間修行を積んで佛様の境界に迄到達したいといふ、この理想に行かなければならない。斯ういふのが所謂四弘誓願でありまして、これが吾々共の修行して行く順序であります。

ところが少し餘計な事を申すやうですが、兎角佛道無上誓願成といふ所ばかり考へて、煩惱無數誓願斷といふことを忘れて居る人が多い。佛様に成りたい〳〵といつても、佛様に成るのには、煩惱を斷つて行くといふことからだん〳〵上つて行かなければならん。自分に煩惱があつて佛様に成りたいといふのは、夢を見て居るやうな話でありませう。どうか一切の人を救ひたい、救ふのには煩惱を除きたい、除くのには法門を學びたい、學んだ結果が佛に成るのだ、斯ういふことでその筋道はチャンと立つて居るのであります。ところがそれを忘れてしまつて、何でも佛に成りたい〳〵といふ所ばかり考へて、自分の煩惱を除くこともしなければ、法門を學ぶといふことをしなかつたら、何時まで經つても佛に成れる譯はない。ところがどうも人間といふものは逆上せやすいものですから、『佛に成れるぞ』といふことを聞くと、何だか今直ぐ佛に成るやうな氣がして、煩惱を除くことを忘れたり、法門を學ぶことを忘れたりするといふことは、實に淺ましい事であります。

この四弘誓願は吾々凡夫の立場から言つたのでありますが、佛様の方から仰しやれば、上行、無邊行、淨行、安立行といふ順序になるのであります。上行とは佛に成る爲の修行であつて、無邊行とは有ゆる教を魂を籠めて學ぶといふ修行である。それから淨行とは自分の心の煩惱を除く修行であり、安立行とは總ての人間に安んじて生きて行くやうに、一切の人間の苦しみや惱みを除いてやる、斯ういふ修行である。だからこの四菩薩のお名前と、この四弘誓願の本文とが一致して行くのであります。たゞ四弘誓願は今申すやうに凡夫から佛に成る順序であり、四菩薩のお名前は佛様のお心持を受繼いで世の中に弘めるといふことになりますから、右から行くか左から行くかの順序に違ひはありますが、結局は一致して行きます。

そこで何といつても私共は、理想を言へば、一切の人を救はうといふ理想を持たなければならん。現實を言へば今の自分達は凡夫だから、この凡夫の迷を除く爲に一歩々々と堅實な修行をしなければならん。斯ういふことになるです。動もすれば理想の方にばかり走つて、堅實に自分を完成するといふ、その一歩々々の修行を怠るやうになつて居るのは殘念な事で、そんなことでは本當の佛道の修行は出來るものではありません。この意味を上行、無邊行、淨行、安立行といふ四つのお言葉に依つて實によく現はして居るので、これは尊いことであります。

此四人は虚空、靈山の諸菩薩等、眼もあはせ心もおよばず。華嚴經の四菩薩、大日經の四菩薩、金剛頂經の十六大菩薩等も、此菩薩に對すれば、翳眼のものゝ日輪を見るがごとく、海人が皇帝に向ひ奉るがごとし、大公等の四聖の衆中にありしにたり、商山の四皓が惠帝に仕しにことならず、巍巍堂堂として尊高なり。釋迦・多寶・十方の分身を除いては、一切衆生の善知識ともたのみ奉りぬべし。

さういふ風にこの四つの事を心に存して佛道の修行をして行かう、又これを世の中に傳へようといふ心持を持ちましたならば、この上もなく尊いことでありますから、そこでその四つの菩薩に就ては、他の者はとても想像がつかない。『眼もあはせ心もおよばず』どう考へてもこれ以上のことは考へられないといふのです。それに比ぶれば華嚴經の中の四方から集つた菩薩とか、大日經の中に同じやうに四方から集つた菩薩とか、或は金剛頂經の中に十六人の大菩薩が現はれたとか書いてあるが、それは今の上行、無邊行等の菩薩に依つて現はされたこの大理想に比べれば、まだ〳〵及ばぬものであると言へる。他の經典に書かれてある教といふものは、皆價値のあるものだけれども徹底して居ない。その他のお經の教だけで行けば、チョウド眼の惡い者が日輪を見ないやうなものである。又海人が皇帝に向ひ奉るが如きものである。又太公望等の四人の勝れた人、これは前にありました通りで、さういふ勝れた人が大勢の人の中にあるのと同じである。又商山の四皓、これも前にありましたが、漢の惠帝といふ天子樣の時に、商山といふ山に籠つて居る大變な賢人が集つて、この天子樣をお扶け申したといふことがありました、それと同じことである。洵に法華經の教といふものは巍々堂々たるものであつて、これより以上のものはなか〳〵現はれて來ることはないと考へられる。

さういふやうな譯であつて、この地涌の菩薩が現はれたといふことは實に尊い事である。だから彌勒菩薩といふ方は非常に智慧の勝れた方であるけれども、この地涌の菩薩の現はれた時に、何故に斯ういふ菩薩が現はれたか、この地涌の菩薩がどういふ方であるかといふことが判らなかつたといふのであります、眼の前の所を言へば、お釋迦樣は印度の國王の子とお生れになつて、世の中の問題に就て煩悶をし、苦悶をされて、その人生の問題を解決する爲に御出家になつて、修行をお積みになつて、それから教をお說きになつたのであります。それだけを考へれば、この地涌の菩薩といふやうな澤山の菩薩を、永い間に亘つてお教へになつたといふことは、到底理解が出來ない。斯ういふことを皆が疑を懷いた譯であります。ところがよく考へて見ると、お釋迦樣が一切の人間の爲に教をお說きになるといふことは、皆が苦んで、惱んで居るから、その一切の人間の苦しみ惱みを除かうといふ廣大無邊なる慈悲のお心持に依つて、教をお說きになつたに相違ない。だから吾々が佛樣の有難いといふことを知る一番初めは應身佛です。

法身佛――本性
報身佛――智慧
應身佛――慈悲

『應身佛』といふのは、慈悲といふことに依つて佛を知ることです。『應ずる』といふのは吾々が救つて戴きたいナと思つて居る、その要求に應じて、世の中に出て慈悲の心持を以て教をお說きになつたのが應身佛で、これが一番初めに吾々に判るのです。皆が苦しんで、皆が惱んで居るところに佛樣が御出現

になつて、教をお說きになつて、皆の要求に應じてお救ひ下さるのでありますから、吾々の一番先に理解するところは應身佛であります。卽ち世の中に出て、慈悲の心持を以て教をお說きになる佛樣であります。

ところがそれからモウ少し深入りして考へて見ますと、如何に世の中をお救ひ下さるといふ慈悲があつても、世の中の一切の樣子をスッカリ御存じでなかつたらお救ひ下さることは出來まい、斯う思はれる。身體の弱い者が、大きい人間を背負つて遠くへ行くことは出來ないと同じやうに、御自分の覺りが徹底的でなかつたならば、世の中に出て吾々をお救ひ下さることも出來まい。斯う思ふと、その慈悲の働は佛樣の智慧である、佛樣は廣大無邊な智慧をお具へになつて居る、人生の事も、自然界の事も皆お解りになつて居らつしやる、それだから吾々をお救ひ下さることが出來るのだ。彼の人間は斯ういふ

譯でこんな迷を有つて居る、此の人間は斯ういふ事情があつて斯ういふ迷を起して居るといふ、一切の事がスッカリ解つて居らつしやるから、これに對して適當な教をお與へ下さつた。斯う考へると、佛の慈悲といふものは佛の智慧から出て居ると言はなければならん。その智慧といふものも急に出來たものではなくて、これは永い間の難行苦行、有ゆる修行をなさつた、その結果智慧が成就したのであるから、その智慧といふものは永い間の難行苦行の結果として出來たのだといふので、その智慧といふものを中心として佛を仰ぎ見た時に『報身佛』といふことになります。報といふのは努力の結果といふことで、努力の結果智慧をお具へになつた、智慧を中心として佛を仰ぎ見た時に、これを報身佛といふのであります。

しかしながらどんなに修行しても、本來無いものが有るやうにならないのですから、修行して智慧を成就されるといふことは、修行される前から大きな力といふか、性質といふかさういふものが具つて居られたから、これを修行して、元來有つて居るお力をだん〳〵大きくなされたに違ひないと考へると、その佛の智慧といふものは、本來具つて居る性質が修行に依つて出來上つたものだ、斯う考へなければならないのです、その本來具へて居らつしやる性質といふことを『法身佛』と申します。斯ういふ風に吾々の方からいへば、佛樣がお救ひ下さるお慈悲が有難い、そのお慈悲は智慧から出たのだ、智慧は何處から出たか、本來具つて居る尊い性質が發揮されて、はじめて出來たのだ。斯ういふ順序に見るのでありますが、佛樣本來の性質からいへばその逆でありまして、卽ち佛は本來尊いものを持つて居らつしやる（法身佛）。それを修行することに依つて絕對に發揮して智慧をお具へになつた（報身佛）智慧をお具へになつたから、その智慧が現はれて一切の人を救ふ働をする（應身佛）、斯うなつて行きます。ですから佛樣の本來の性質からいへば法身、報身、應身といふ順になり、吾々が佛を仰ぎ見る方からいへば、應身、報身、法身といふ順序になる。一番初めに袴袢を著物を著てもさうでありませう。これは著て、下著を著て、上著を著てそれから、羽織を著るといふ順序になる。ところが著物を脫ぐ時には、先づ羽織を脫いで、上著を脫いで、下著を脫いで、一番終ひに袴袢を脫ぐ。チョウド著る時と脫ぐ時とは逆になります。それと同じことで、佛樣の方からいへば法身佛が報身佛になり、報身佛が應身佛になる。吾々人間の方からいへば應身佛が先づ判つて、それから報身佛が判つて、結局法身佛が判る。斯ういふことになるのであります。

そこでその佛樣が本來尊い性質をお具へになつたといふことは、吾々も同じ性質を具へて居るといふことに外ならぬのであります。何故なら、どんな尊

い教を佛がお與へになつたところで、こちらが受付けなければそれまでの話です。譬へば紙にしても布にしても、それが濡れて居つたら、いくらマッチを擦つて火をつけようとしても、つきはしない。これが乾いて居るから、火をやればつきます。吾々が心の中に迷ばかりであるならば、どんな善い教を與へても、その教はまるで消えてしまふ。チョウド濡れた所にマッチを擦るやうなものであります。ところが有難いことに、吾々はどんなに煩惱を有つて居つても、その煩惱の根本に、煩惱に眩まされないだけの本來の性質がある。その性質が佛の教に依つて發揮され、又伸されて行く時に於て、はじめて吾々が覺りを開くことが出來るのであります。これは有難いことです。吾々がどんなに迷を有つて居つても、どんなに間違つて居つても、迷だけではない、間違ひだけではない。その迷の根本に於て、迷に離れて行くだけの尊い性質を有つて居るといふことは、實に有難いことである。さういふ性質を有つて居るところに、佛の教といふものが加つて來るから、そこで初めて吾々の迷を除いて覺りを開くといふことになる。これは實に有難いことであります。

そこでモウ一つ進んで言ふと、どうして吾々はさういふ尊い性質を有つて居るのだらうか。又どうしてこの吾々に尊い性質を發揮させるべく、佛の教が與へられるのだらうかといふことを考へて來ると、吾々のこの尊い性質の本といふものと、それから佛の御出現になつたその根本といふものが一つの源でなければならんではないか、斯ういふことが考へられます。そこではじめて法華經の壽量品にあります『本佛』といふ佛のお力が根本であらう。その一つの佛のお力が現はれて、吾々各自に具へて居るところの佛性ともなつたのだらう。又その一つの佛のお力が現はれて、お釋迦樣がこの娑婆世界に出て御說法下さつたといふことにもなつたのだらう。斯ういふことになるのでありまして、結局法華經の壽量品に說かれた『如來祕密神通之力』といふ、その如來といふのは所謂本佛であります、根本の佛樣であります、その根本の佛樣が捉まつて、はじめて一切の問題が解決が出來る、斯ういふことになつて行くのであります。そこ迄行かないと問題は途中で消えてしまふ、そこ迄徹底的に考へなければいけない。ところが人間が草臥れてしまふものですから、そこ迄行かない間に『まアこの邊でよからう』といふので途中で尻を落著けるのです、それはいけない、だん〳〵押詰めて行けば、この本佛といふ根本の一つの佛樣のお力が總ての物の根本になる、土臺になるといふ所まで行かなければならないのです。それが信仰の徹底といふことであります。そこ迄行かなければ本當の信仰といふものは根柢を有たない。だからこの開目鈔を少し先へ讀んで行くとありますが、法華經の壽量品がなかつたならば、佛教といふものは根柢を失ふものである。人間でいへば身があつても魂が無いと同じことだと言はれたのはそれなのです。

しかしながらその本佛を知るのには、前に申した三身佛が判らないで本佛が判る譯はない。佛樣のお慈悲が判らないで本佛が判る譯はない、佛樣の智慧の廣大なことが判らないでその根本が判る譯はない。だから報身佛、應身佛といふものを、本佛が解つたからといつてこれを輕んじてはならないのです。たゞ唯一絕對の佛があらうとも、それが世の中に出て吾々を救ふところの働をなさらなかつたならば、吾々はそんな佛樣のあることを知らないでおしまひになつたかも知れない。有難いことにお釋迦樣が御出現になつて教をお說き下さつたから、その教に依つて吾々は本佛即お釋迦樣であることを知るのでありますから、その本佛が解つたからといつて、報身、應身の、世の中に出て教をお說きになつ

た佛樣を輕く視るといふことがあつてはならないのであります。然るに法華經を中心としない他の敎に於ては、或は毗盧遮那佛といひ、或は大日如來といつて、その根本の佛樣は現はして居るけれども、その根本の佛樣が、活きた世の中にお釋迦樣となつて現はれて吾々をお救ひ下さるといふ、この事とこれを通じて考へなければならんのに、それを別々にして居る。だからいけないと言ふのです。根本ばかり考へても仕樣がないではないか、現はれて働きにならなければ何にもなりはしない。それが日蓮上人の一生涯の主張です。絕對の本佛といふものと、目の前に現はれたお釋迦樣といふものとが通じて一つであるといふことを考へなければいけない。眼の前のお釋迦樣だけを考へたのでは小さくなつてしまふ、根本の佛樣だけ考へたのでは現實の生活と離れてしまふ。この根本の佛樣が現はれて釋迦牟尼佛となつて、その釋迦牟尼佛が吾々の爲に敎へをお說き下さる。この敎をお說き下さつた有難さといふものを感ずるならば、その根本に遡つて、本佛の實在をシッカリと捉へなければならんではないか、斯ういふことで本佛と釋迦牟尼佛と一體にして見て行く、それが法華經の壽量品の非常に尊い所であります。それを日蓮上人は始終主張して居られるのであります。どうも一方から言ふと、眼の前の所ばかり見て根本を忘れるやうになる、又一方の極端に走ると、その根本の事ばかり見て居つて、實際の世の中といふものとまるで緣が無くなつてしまふ。それはどちらもいけないといふのです。

つまり本末といふものを一緒にしなければいけない。本がなければ末は出ません。末になつて現はれなければその本は役に立たない。だから本末を一つにする、これが一番大事な思想です。ところがどうもどちらかに傾きやすい、本の方に執はれてしまふと末を忘れる、末ばかり考へて居ると本の方を忘れてしまふ。これがうまく行かないので、吾々も考へて見ると兎角どちらかに傾きやすいのですが、根本からいふと、末に非んば本を現はすことは出來ない。本なくして末は現はれない。斯ういふことであります。それで吾々の日常の生活からいふと、本といふことは成佛をすることであつて、末といふことは日々の善事であります。これを離してはいけない、吾々の理想とするところは成佛である、佛と同じに成るといふことである。しかし佛と同じに成るにはどうしたら宜いか、毎日の生活を離れて碌な事は出來やしない。だから今日の一日、この一時間、この一秒を輕々しく視ない、圖々の善い事を積むことに依つて、結局吾々は佛に成るのだ、斯う考へなければいけない。しかしその佛に成るといふ根本を考へないで、日々の事ばかりやつて居ると、『今日一日無事に濟めばいゝ』といふやうな考になりますから、末に執はれゝば淺ましい凡夫の生活になります、本にばかり執はれゝば空想になります。そこで天台大師がその事を仰しやつて、根本は大事だけれども、根本にばかり偏つてはいけないといふので、涅槃に執はれていけないといふことを申して居ります。

涅槃に住せず、生死に住せず。

これは非常に良い言葉です。ウッカリすると生死に住する、生死といふのは人生の變化でありますが、眼の前の事ばかりに執はれてしまふと、その日その日を送りさへすればそれでいゝと思ふ、それではいけない。變化極りない人生に執はれないやうに、眼の前の出來事よりもモット上の事を考へろといふ、それが生死に住せずであります。それなら悟つてしまつたらそれでいゝかといふとさうではない。涅槃に住してはいけない、『俺は悟つてしまつた、モウ他の事は學ばない』と言つてその中に引つ込んでしまつてはいけない。その力を以て人生の事に骨折

るやうにしなければいかん。根本の悟りといふことと、日々の善い行ひといふこととが離れないやうにして行かなければいけない。ウッカリすると生死に住して、たゞ『毎日を都合好く送ればそれでいゝ』と思ふ。又ウッカリすると涅槃に住して、『何でも悟つてしまへ、人生の事は皆捨てゝしまへ』となつて行く。それではいけないといふので天台大師は、『涅槃に住せず、生死に住せず、』どつちにも偏らないやうにして行かなければならぬと仰しやつたのでありますが、これは洵に意味の深い事であります。

その事を此處にも言つてあります。根本の佛様といふものを大事にしなければいかん。その根本の佛様といふものが世の中に現はれて行くのだから、その世の中に現はれるといふことも大事である。そこでお釈迦様は久遠の本佛であるから、その久遠の本佛の教を受けたところの上行、無邊行等の菩薩が末法の世に再び現はれて、此處で教を弘めて一切の人を救ふといふことで、はじめて久遠の遠い昔から佛様の教を受けた甲斐があるのだ。それをしなければ永い間教を受けても何の役にも立たんではないかといふことを言つて居られるのであります。

日蓮上人はその通りであります。日蓮上人は御自分は安房の漁師の子に生れたのだ、身分も無ければ位も無い、何でもない者であるけれども、この何でもない者が、佛様のお心持を承け継いで世の中に正しい教を弘めるといふことに於て、はじめて自分の、この世の中に存在する甲斐がある、だから日蓮上人は一方に於ては自分を極く低く見て居らつしやる。自分一身からいへば『旃陀羅が子なり』漁師の子である。身分も無ければ位も無い者である。これは御自分の一身を考へられて仰しやつたことであります。その身分も位も無い者が、佛の教を世の中に弘めるといふことに力を盡す時になると、『日蓮の頭には大覺世尊代らせ給ふ』この頭には佛様が宿つて居

らつしやるのだ、自分は凡夫だけれども、この教を世に弘めることに依つて佛様の身代りである、このぐらゐの決心を以て行くのだと言つて居られる。一方に高い理想を立てゝ低く自分を反省して行く、この兩方がなければいけないのです。人間の偉大なこととといふのは、理想と現實のこの間が遠ければ遠いほど、その人は偉大なのです。出來るだけ高い理想を立てゝ、さうして出來るだけ自分を反省して、自分をつまらない者だと思つて行く。この間が遠ければ遠いほど人間は偉大なのです。つまらない人間は理想もなければ現實もない、眞中の所にグズ〳〵しておしまひになる。何が理想であるか、何にも無い、何を反省するか、何にも反省しない、たゞ毎日を暮して行けばいゝ、理想もなければ現實もないといふことになる。大きな理想を立てゝさうして現實を顧みて、この理想を實現する爲にはまだ〳〵足りないぞといつて、現實の自分を責めて行けば、だんだんこの理想が實現されて行く。それで日蓮上人は『日蓮は旃陀羅が子なり』と仰しやつた。これは現實の自分を振返つて見られたのであります。又『大覺世尊代らせ給ひぬ』と仰しやつた、これは理想を說いたのであります。自分のこの教を說くことが、巡て世の中の一切の人を救ふだらうと斯う仰しやつたのであります。

この事はたゞ宗教の上ばかりではありません。吾吾がこの人生に處して一切の事をやるのがその通りであります。高く理想を掲げて、低く自分を振返つて行かなければならない。理想は出來るだけ高いが宜しい、自分を反省することに於ては、出來るだけ自分を押下げて行かなければならん。低く自分を顧みるといふことは、高い理想を實現する基である。斯う考へて行くことが、法華經の御精神にも叶ひ、日蓮上人の態度にも叶ふことであらうと思ひます。斯様に考へてこの本文を讀みますと、非常に尊く思はれるのであります。（第二十二講了）

眞の實在

橋本辰居

我智力如是　慧光照無量　壽命無數劫
久修業所得　汝等有智者　勿於此生疑
當斷令永盡　佛語實不虛

―妙法蓮華經如來壽量品―

三千大千世界を以てするも購ひ得ない如意寶珠は一箇よく萬寶を雨すと聽く、お自我偈は恰も如意寶珠の如く、無量の美しい寶を吐き出す、如來の輝りかゞやく智慧の光に照らされて娑婆世界は忽ち瑠璃の淨土となつてしまつた。

我が智慧の力は是の如く壽命は無量である。如來の梵音聲は嚴かにひゞく、衆生の歡喜は如何ばかりであらう。凡そ生けとし生けるものは悉く生死の波に浮き沈み、はかなき流轉をたどるのであるが、それにも不拘、自覺、不覺を問はず眞の實在を心のそこ深く求めて居るのである。今や眞の實在、魂の歸依所を得た、それが歡喜でなくて何であらう。眞の實在とは過去、現在、未來に亘り完全に存在することである、目の當り地湧千界の大菩薩を見ては、釋尊が無始の古佛たる事一點の疑を容れない、過去に於て無限なるが故に未來も亦永遠である。而してこの無限のいのちは、釋尊が久しく業を修して得給ひし所である、三千大千世界を見るに乃至芥子の如き許りも是れ菩薩にして身命を捨て給ふ處に非ざることとなく、或時は雪山童子として半偈の爲めに身を投げ尸毗王としては鳩の爲めに肉を秤にかけた、かゝる菩薩行を修すればこそ無量の壽命を有し給ふのである。又反面に於てかゝる菩薩行なき時は無限たり得ない、眞言の大日如來の如き修業を明さざる佛、無修驗の佛は因果の法則を以て照す時敢えなくくずれ去つて了ふのである。久修業所得、語は簡にして而も無量の意味が湛えられて居る、之れ以外に眞の實在はあり得ない、眞の實在は常恒不斷に說法敎化し給ひ、一日片時も止むことなく功德を修し給ふ釋尊のみである。恰も寶祚の無窮は、御歷代御德治の結果であり、而して眞の御德治は寶祚の無窮によつて初めて可能なるが如くである。

更にこの本因本果の因果論を吾人に當はめて考へ見れば我々罪深くして佛を見奉ることなく、三界の間を車輪の如く廻り、父子の中にも親の親たる子の子たる事をさとらず、夫婦の會遇るも會遇たることをしらず、迷へる事は羊目に等しく暗き事は狼眼に同じいのであるが、併も佛を見奉らんと欲して自ら身命を惜しまず行を積み德を累ねて行けば、少分佛を見奉ることが出來、少分佛を知るが故に愈不退轉の修行をはげむが如く、逆に佛を見奉らざるが故に罪を重ね、罪を重ねるが故に益々佛を見奉ることなく、かくて又深重の罪を造るに至るが如くである。我々は是の如くして良き緣を取れば佛界に向ひ、惡緣に會へば地獄に行く、譬へば水精の玉の日輪に向へば火を取り、月輪に向へば水を取るが如くである。かく衆生は緣によつて、或時は上に向ひ、或時は下に向ふのであつて、はかなき存在であるといはねばならぬ。唯だ釋尊のみあつて常に衆生を愍念して濟度に止息し給ふことがない、永遠にして常住である。

かゝる應身の常住は壽量品の精髓であり、一切經の心髓である。日蓮聖人の御主張は應身の顯本にあつた、法・報・應三身圓融の上に立つ應身常住を以て最高究極とせられたのである。他の多くの敎を見るに、超人格の常住を說かんとして而も眞理と衝突せるキリスト敎の如きあり、超人格を捨てゝ眞理を以て最高絕對となす法身論乃至哲學あり、或は修行の結果こそ永遠の生命を有すとなす天台の如きがある。先づキリスト敎についていへば、その神は全然

哲學的根據を有つて居ない創造說は、本無今有の過を免れ得ない。不合理なるが故に信ずといふは妥當である。次に眞理を以て最高絕對とするは一見正しいやうであり、而して現在世界に於て最も勢力を得て居る思想であるが、よく考へて見れば之は非常な間違である。一體眞理とは何であらうか、そは結局事物と事物或は現象と現象との關係に他ならぬ、存在を離れては眞理はあり得ない、若し存在をはなれて眞理があるといふならば、それは抽象實在論となつて了ふ。さて眞理とは存在と存在との常恒的關係故、その存在そのものがこはれる時は眞理も亦こはれなければならぬ、而してあらゆる存在、あらゆる現象は、流轉するものなりとせば、眞理は移り變るものとなり、之を以て最高絕對とはなし得ない。眞理が永遠絕對たる爲めには永久に變らぬ眞實在者を俟つて初めて可能なのである。あらゆるものは流轉する、而して眞理のみは不變なりと主張するは明白なる矛盾である。第三に山や河は遂には移り變るものであり、從つて眞理も亦變遷を免れざるものとなし、唯だ人間のまごころ罩めし努力の結果のみが永久に殘る、これこそ永遠であるとの考へが起つて來る、時が經てば家は朽ち、田畠は荒れるであらう、併しその人の功業は千載の下、人心をして感憤興起せしむといふのである。されど永遠性の根據として說かれし功業とは何であるか、善行とは何であるか、まごころとは如何、之等は之のみでは解明し得ない、永遠の存在、眞の實在によつて初めて明らかとなるものである。又時間的に限られたる努力の結果は、たとひ千年萬年を以て數ふるも遂に無限では あり得ない。

以上のべし眞理も、修行の結果も、それ丈けでは永遠性を有せず、必ずや或る眞の實在者を得て初めて永遠となる。この眞の實在者は、この眞理の上に立つものであり、之に永遠性を與ふるものである。

されば應身の常住が表はれないならば、法身の常住も、報身の常住も、一切くづれて了ふのである。一切の根本は應身の常住にある。釋尊の常住表はるゝ時、一切の諸佛菩薩は常住となり、一切の國土の神神も亦初めて存在の基礎を得る。釋尊は全超人格の統一者である、娑婆世界に於てのみならず、全宇宙の何處を探すも 釋尊の如き完全なる哲學的根據の上に立つ實在者はなく、又あり得ないのである。恰も天に二日なく、國に二王なきが如くである。されば之を明せる壽量品を捨て去る時は、諸佛菩薩は全て滅盡し、一切の國の神々も亦存在することが出來ない。釋尊は一切の諸佛・菩薩及び諸天善神の統一者である(果一)。 次に釋尊の常住は眞理をして眞に眞理たらしめる、こゝに諸法實相・世間相常住とは說かれて來るのである。釋尊の妙護常住は、絕對の眞理と相俟つて圓滿玉の如き宇宙觀を構成する(理一)。超人格の實在は、人間の善なる方面を開示する、恰も月出づれば白蓮榮え、日現ずれば紅蓮敷くが如く釋尊の常住は人間の佛性を開顯する。こゝに人間の本質論は統一せられ(人一)。之に基く行動は自ら一如し(行一)。 而して世の凡有敎はこの點に歸着せしめられる(敎一)。

是の如く釋尊の常住は一切統一の根本であり、あらゆるものゝ存在根據である。されば壽命無數劫なりとは、一切經の心髓である、此に於て疑を生ずることなく、佛語を信受するものは眞に智慧を有するものである。

日蓮宗概觀

（其十三）

故　梶木顯正

ろ、本門の本尊は十界具足なり

本門の本尊は前説するが如く、三寶調和の本尊であると共に十界具足を示して居るのである。此處で注意をせねばならぬことは曼荼羅と本尊の意味である。

曼荼羅と言ふのは佛教の『宇宙の見方を圖表に書き現はしたもの』である。故に之れは哲學的のものであつて、直ちに宗教の本尊とはならぬ。言ひ換へれば十界（前にあり）互具と云ふ哲學的平等の一面を圖示したもので、本尊に對すれば、本尊の立場と云ふべきものである。處が本尊となると、平等と云ふ哲學的原理の上に立つた差別の相を示すものであつて、其處には慈悲があり、涙があつて常に救ひの手が動いて居るのである。處が曼荼羅にはそれが無い、だからこの曼荼羅と本尊との關係は、丁度御皇室に於て御即位式の時に必ず御用ひになる高御座と、此處にお登りになる　天皇陛下との御關係と同じと心得ればよろしいのである。即ち曼荼羅とは高御座であり、本尊とは至尊に當るのである。必ず御本尊はこの高御座たる曼荼羅の上に御立ちになる、故に御本尊と曼荼羅とは一往意味の上からは違ふけれども、再往云ふならば一ッと成つて居るものである事を了解して居らねばならぬ。

其處で本尊は十界具足の相であると云ふ問題であるが、同樣に曼荼羅も十界具足を表したものだと前に言つた、そこで前の曼荼羅の場合は平等價値と云ふことを理屈の上から表はしたもの、今本尊の場合は差別の側から事實の相を以つて具足の意味を示したのである。この意味を今一度言を換へて云へば、曼荼羅の方は理屈から相待的の姿を示した方、本尊の方は絶待的の姿を現はしたものである。此處に十界具足を示すとは、絶待界の佛を現はして佛界の一界を代表することを示し、本化の菩薩を以つて菩薩以下の九界を代表した姿を現すのである。この時は三寶中の法寶は佛の悟の內容として（佛樣の中（味）を見る）如來の靈格の中に見て終ふ。斯くして本佛の佛界（一界）と菩薩界（九界をこの界の中に含む）の九界と都合合せて十界となる、この相を三寶の上に見て十界具足と云ふのである。所が中には曼荼羅の中央に南無妙法蓮華經と大きく書いてあるから、之れが一番有難いので之れが本佛の御名である、釋迦如來とか、日蓮聖人なんと言ふのは第二義だ、と云つて之れを『中尊』と呼んで居る者が大分ある。が是れなぞは靜かに考へて見ると最初から曼荼羅と本尊とを混同にして考へる所から來た誤りである。なる程救はれる衆生の方から見れば、妙法蓮華經と云ふ教法に依つて如來に救はれるのであるから、一番妙法蓮華經が有難いと云ふのは當然である、が然し救ふ佛の方からすれば、妙法といふ教法は衆生を救ふと云ふ慈悲心から出した手であるから、手よりも佛自身が有難いのだぞ、と云ふ事に成つて來る。要するに佛が有難いか、妙法蓮華經が有難いか、と云ふ問題は見る者の立場が違ふからだといふ事に歸するが、最も公平な見方とすれば先づ第一番に佛の慈悲心が動いて次に教法と云ふ救ひの手が出、其の次に使を出して衆生に教へ知らし

める、と云ふ本化の菩薩が現はれて來る順序になる譯けである。斯う意識する事が最も正しい信仰意識だと高調したいのである。

第五章　修　行

(一)　修行の相貌

何の宗教でも皆さうであるが、特に我が日蓮宗ではこの修行と云ふ事を重く說いて居る。則ち唯だ信じた丈ではいけない、信じたならばそれを身體の上に修行し、努力を通して行の上に現はさねばならぬと深く强調するのである。其處で修行の相貌（形）は何うかと云ふ事に成つて來る譯けである。この修行の相貌と云ふ事になると種々時代に依つて樣々なスガタが有る譯けであるが、先づ大體に於て消極的修行と積極的修行の二種の上から語る事としやう。

イ、消極的修行

この消極的修行と云ふのは內的方面の修行一般を指すので、先づ其中でも根本的中心の修行を言へば「受持」の一行である、即ち「信ずるが故に受け、念ずるが故に持つ」と云ふ、心そのものゝ中に佛の敎を受け入れ、其の敎を心の底から念じ持つ事である。其處でこの持つと云ふ事に付いて次には「三業に持つ」と云ふ事を敎へる、三業とは身と口と意の三を云ふのであるが、口には持つても身には持てないと云つた調子で中々之れが三業の上には六づかしい、特に近頃はこの組が非常に多いのである。是の受持行は一行であるけれ共一番大事な修行であるから、深くお互ひは相誡め會つて努むべきである。

次に此の根本條件から出發して正行助行の二種を明す。即ち

正行……南無妙法蓮華經

助行……經典讀誦

である。正行とは直接菩提の功德を積む爲め、助行とは自分の信仰を增進させる爲めである。所が斯く言ふと早合點して、丁度腹の痛む病を持病にして居る人がモルヒネを呑めば直ぐ癒ると聞いて、多分にヤツタラ効力が早からうなぞと考へて、何んでも多數讀んだら御利益が多いんだと無暗に多讀を勸める人が有る、が本宗では何も特に數や時間に依つて功德の多少があると敎へるのではない、それは其人の氣の濟む程度に任せて五百返唱へねば氣が濟まぬ、三十卷讀まねば氣持が惡いと云ふ者はさうヤツタラよい、が十返でよいと思ふ人は十返でよいのである。一心淸淨といふのであるから誠心込めて唱題讀誦するなら十返でも一卷でもよいのである。必ずしも數の多少に有ると云ふ事では無いことを深く心に銘すべきである。日蓮聖人は「心の堅きに依つて神佛の守りも强し」と仰せられ亦「信心だに弱く候はゞ峰の石の谷にころび、空の雨の大地に下るが如く、大阿鼻地獄疑ひあるべからず」と、大警告を吾等にお與へ下すつたのである。親の意見を馬の耳に念佛と聞き流す不孝者とならぬやう御同樣注意誠心せねばなるまい。

ロ、積極的修行

修行として尤も大切な事は、常に如來の敎と離れぬことである。敎を離れると人間と云ふ者はロクナ事はやらぬものに定つて居る。故に何時も如來の敎に添ふて居らねばならぬと念願して居る事が大事である、かく云つたからとて每日本を見て居れお經を讀んで居れと云ふのではない、心の中に、本佛が在す事を忘れるなと言ふのである。內に之の信仰が有つて始めて外に積極的修行が出て來るのである。この積極的修行の方を、

一、正法の擁護

二、菩薩行の實行

と名ける。正法の擁護と云ふのは如來の教が盛んに人の世に行はれるやう護り弘める事で、菩薩行の實行とは如來の大慈悲の有難いことを人に知らしめる一切の善行を指す、一口に言へば社會公共の善を身を以つて行ふ事である。これは「佛子の自覺」から出て來た一切の運動、之れを總稱した言葉である。で法華經には「資生業等皆順ズ二正法一」とあつて、法華經を宣傳するもよし、政治運動を起すもよし、寺院教會を建てるもよし、教育事業を起すもよし、貧民救濟もよし、施療病院もよし、一切の教育感化救濟事業等は皆よいのである。然してこの菩薩行とは半分は自分の爲であり半分は人の爲である。情は人の爲ならずとは之を云ふ、だが此處に注意を要することは何んでも慈悲の心からやりさへすればよい、と云つても其處には必ず教化と云ふ事を離れては、情も往々無益に終ることが有る、故に智慧の眼を開いて對告衆をして教へ導きつゝ救ふ、と云ふことを忘れてはならない。

以上この正法擁護と菩薩行の實行とを爲す上に於て、攝受と折伏と云ふ二方法が有ることを明す。攝受とは母が子を愛するが如く宥め賺して、教を弘める方を云ひ、折伏とは父の慈愛の如く時に依れば拳固の一つも呉れて無理にも護らしめ行はしめて、法華經に結緣せしめるを云ふ。然も此の二ッは時に依つて緩儼宜しきを得て行ふべきものだと教へる。今末法の時代は、日蓮聖人は攝受行の時に非ずして折伏行の時なりと判じ玉ふ、なぜならば末法は如來の教化に接した者は一人も無いので、全部下種と云つて法華經に緣を結ばせ、未來に佛果を得る樣ふその種蒔きをする時だと云はれて居る、故にこの時代は反對する者も、贊成する者も一樣に皆法華經に依つて成佛の結緣を得ると說く。この立場から大聖人は常不輕品に依つて强ひて法華經を說くべしと、

折伏行を主張されたのである。故に本宗の先師先輩の布教方法は皆この筆法であつたのである。不輕品第二十には常不輕菩薩が末代惡世に出て法を說き玉ふ姿を說いて云く、

我深敬二汝等一不二敢輕慢一所以者何　汝等皆行二菩薩道一當レ得二作佛一　云云

と、あつて「お前方は表面は愚な凡夫のやうであるが、心の奥儀には立派な光りを放つ佛性(佛の種と云ふ)を持つて居る者である、だからやがては立派に菩薩の道を修め行ふて佛と成るものである。何うしてお前達を輕しめ侮る事が出來やう、」と法華經に來たるならば、男も女も俱に佛樣と同じく人格は平等である、と教へる教義に基いて、厭がる者に無理に法を說いて居る。これは何故かと云ふと佛教の中でも法華經でなければ、此の佛と衆生との人格平等は明されてゐないのである。法華經では「佛は親であり、衆生凡夫は子である」と說かれてゐる、丁度我　天皇陛下と國民とは表面は「君臣の分」と云ふ事で儼然たる區別があつて、　天皇は神聖にして犯すべからず、と成つて居るが裏面の情操の處は父子の關係になつてゐる。明治天皇の御製に

罪しあらば我れをとがめよ天津神
民はおのれが生みし子なれば

とある。今法華經に於て佛と衆生の關係は表面は救ふ佛と救はれる衆生、と成つてハッキリ區別せられて居るが、事實裏面の關係は全く父子の關係になつて居る事を敎へて居る、故に無理にも親の情で、如來の子である事を覺らしめ度い、この一念が則ち折伏と云ふ形ちで弘通の上に現はれるのである。(法華經でなければこの事は知らぬ、故に何んでもかで)法華經には五種の修行を明す。

一、受持行　(佛樣の教を信じて心に受け身に持つ修行)
二、讀　行　(心に讀み身に讀む修行　卽　實行である)

三、誦　行（熱心にお題目やお經を唱んじて讀む修行）

四、解說行（如來の教をわかるやうに說いて聞せる修行。即ち說教講演をする事）

五、書寫行（如來のお經を書き寫して人に知らしめる修行）

以上のこの五種の修行は一言に纏めて云へば「正法の護持」と云ふ事である。彼の有名な信者のアソカ王が佛樣の御涅槃の後、至る所へ標柱を建て、「正法を護持するは人中の最勝事なり」と記されて居るが、眞に正法法華經に來てこそ始めて人間の根本的尊さが知らるゝので、同じ佛敎の中でも法華經以外の諸經では、其れが知られぬのである。法華經の尊いのは先づ第一は此の點である。故に法華經の修行は消極的に、內に自分の爲の修行も大事であるが、更に積極的に外に知らしめる爲の修行が、一段と大事である、といふ事になるのである。

暑中御伺申上候

本年は特に各位の身心健固、信力倍增、爲法國御精進奉祷候

恐々

昭和十三年孟夏

財團法人　統一團

幹部

身延山御書の感激

笹木欣爾

一

一氣に讀み通すには手頃な長さの上に、行文は平明暢達、配するに文彩の美しさを以てしてゐますので、身延山御書の一篇は、兎角スラ〳〵と調子に乘つて誦し切つて了ふ嫌ひなしといたしません。併し、こゝろして靜かに拜するならば、此の御書の內に、日蓮上人の薰高い宗敎生活を見出さずには居られませぬ。

上人の宗敎生活に就いては、實は、御書の全部が皆、多かれ少なかれ示して居りますので、何も殊更ら身延山御書を云ひ立てるにも當らぬのでありますが、この御書には一きわ鮮明に述べられて居ります。そして、上人のこの宗敎生活は、その全部が直ちにそのまゝ、私共宗敎へ志す者への生活指針ともなりますので、この一篇は求道者にとり、一入ありがたく感激を以て手にいたし得るのであります。

因に、身延山御書は、建治元年八月二十一日、壽齡五十四、身延の御草庵で御述作になりました。舊の八月の下旬です。深山の秋は漸く闌けていつたことでありませう。

二

誠に身延山の栖は、ちはやふる神も惠を垂れ、天下りましますらん。心無き賤の男、賤の女までも心を留めぬべし。哀れを催す秋の暮には、草の庵に露深く、檜にすだく蜘蛛の絲玉を連ぬき、峰の紅葉いつしか色深うして、絕々に傳ふ篭の水に影をうつせば、名にし負ふ龍田川の水上もかくやと疑はれぬ。又後には峨々たる深山聳えて梢に一乘の果を結び、下枝に鳴く蟬の聲しげく、前には湯々たる流水湛へて、實相眞如の月浮び、無明深重の闇

晴れて、法性の空に雲もなし。かゝる砌なれば、庵の内には貴は終日に一乘妙典の御法を論談し、夜は竟夜要文誦持の聲のみす。傳聞く釋尊の住み給ひけん靈鷲山を、我朝此砌に移し置きぬ。霧立ち嵐烈しき折々も、山に入つて薪をこり、露深き草を分けて、深谷に下りて芹をつみ、山河の流れもよき巖瀨に菜をすゝぎ、袂しほれて干佗ぶる思ひは、昔人鹽が詠じける、和歌の浦に藻潮たれつゝ世を渡る海人もかくやとぞ思ひ遣る。つく〳〵と憂き身の有樣を案ずるに佛の法を求め給ひしに異らず。

冒頭、先づ身延の山の自然が、麗しい筆で叙してあります。美文であるには相違ないのですが、單なる叙景として讀むならば、私は、上人の日頃の御筆尖には珍らしい美文である位に思ひなして、別に大した感銘も湧さぬでせうし、又、現代の私共の眼には、その文章に何としても相當の時代色を認めざるを得ないのです。こゝは矢張り、已に云はれてゐる如く、自然美の單なる寫實的描寫とは見ずに、年と共に益々深められて行つた　日蓮上人の、豐な内觀の世界を眼前の山の秋容に托して述べられたものといたすべきでありませう。美文のための美文に非ずと判れば、今迄若干ヒント外れの感のした時代色が、却つてヨク一層昔を偲ぶよすがとさへなつて來ます。上人の内生活を裏づけとした美的叙景として見て、初めてこゝは、眞々たる生命の通つた一節となります。上人の内觀界は、正に自然の美しさにも配ばるべきでありましたでせう。こゝには、上人の宗教的生命の輝しさが、さながらに象徴されてゐるのであります。

日蓮上人の表面に現ばれた事蹟ならば、御書を讀めば直ぐ判明いたします。御一生が非常に劇的であるだけに、それだけ私共への刺戟も強くあります。が一度、その御心境となりますと、我が凡心を以てしては、全く拜察いたしようもありません。一人の人間の心を知ることは、同じ程度の人同士が永く相接してゐても、仲々つかみ得るものではないと思はれます。それを、高い〳〵心を、時代をへだて然も限りある文書の裡に、凡心を以て捉らうと云ふことは、蓋し不可能に近いかも知れません。然るに、こゝには聖心の世界が、自然美に托してマザ〳〵と描かれてゐるのであります。俗塵なき自然の崇高美が如何に絶對的であるか。その美そのまゝの御内觀の世界なのであります。眼には慰へ得ぬ無形の境涯が、眼に捕へ得る自然の美觀に寫象されて居るのです。日蓮上人の内觀界は、私共には餘りにも高すぎます。が、身延の山の自然美を思ふことに依つて、その幾分なりでもを髣髴させ得るやうに考へられます。御書多しと雖も、これ程の大きな叙述は珍らしいでせう。この一節のありがたさが、身にしみ通つて參ります。

三、

「誠に身延山の栖は……」云々と滑かに續いて行く美的叙述から、上人の内境を偲び奉りますが、こゝには今一ツ更に味ふべきものがあると存じます。それは、この文に依つて象徴されるやうな宗教的境地に位する聖者が、然もまた、此の文の示すが如き山の自然美に相對した時、この主客兩者の間には、果して如何なる世界が釀し出され參つたでありませう。それであります。前には、私共の己れを空しうして、上人の心境をひたすら偲んだのでありますが、今度は、未熟ながらに私共が己れの立場に無心になつて落ちつき、聖者と自然との間に當然生じたでありませう一ツの世界――世界と云ひますか、情景と云ひますか。渾然たる雰圍氣と云ひますか兎に角こゝに當然惹つた啓の氣高かるべきあるものを思ふと申すのであります。どんな風に思ふか！……それは各々の持つ情操に俟つ外はありません。私は、至高の世界を提示すれば足りるのであります。これより外には、何も云ひ得ないのであります。

上人の内觀界を思ふこと切にして、この世界あるを見落すなら、偉大な損失にも等しいと思ひます。これは、味つても味つても、味ひ足りぬ世界であります。聖者と自然との一如し切つた世界、この渾沌未分の風光と云ふべき境地は、蓋し宇宙究竟の相ではあるまいかと存じます。

四、

身延山御書は、美しい書きだしに始つて、求道者たちの激しい修行談へ續きます。

昔、釋尊　樂法梵士としては皮を剝ぎて紙とし、髓の水を取りて硯の水とし、肉を割きて墨とし、骨を擂きて筆とし、下方の迦葉佛に値ひ奉りて、「如法は應に修業すべし　非法は應に行ずべからず　今世若しは後世、行法の者は安穩なり」と、此文を傳へ給ふ。堪薩王子としては飢たる虎の爲に身を與へ、雪山童子としては半偈のために身を投げ、尸毗王としては、鳩のために肉を秤にかけ、乞眼婆羅門には眼をくじり取らせ給ひき。……

又、止觀の一に云く、如來慇懃に此法を稱歎し給へば聞く者歡喜す。常啼は東に請じ、善財は南に求め、藥王は手を燒き、音明は頭を刎ねらる。一日に三度恆河沙の身を捨つるとも、尚ほ一句の力を報ずること能はじ、況や兩肩に荷負て百千萬劫すとも、寧ろ佛法の恩を報ぜんや云云。文の心は、如來ねんごろに此法を稱歎し給へば、聞く者卽ち歡喜す。常啼菩薩は東に法を請ひ、善財菩薩は南に法を求め、藥王菩薩は臂を燒き、音明王は頭を刎られたり。一日に三度恆河の沙の數ほどの身をすつると

も、尚ほ一句の法恩を報ずる事あたはじ、況や二つの肩に荷負ひて百千萬劫すとも、佛法の恩を報ずる事あるべからずと云ふ心なり。

眞實の求道はきびしくあります。捨て身になつて、法を求め、行を修するのであります。こんな求道は、一體なんの目的あつてするのかと云ひたくなりませう。佛教に於ける修行は、轉迷開悟、安心立命にあるのであります。開悟、立命は決して容易なわざではありません。そして、この開悟のためには、三祇百劫の修行を要すると云はれます。修行せねば得られぬ開悟なのであります。開悟、立命は、本當に、修行し切つた後でなければ得られぬのでせうか。勿論、立命の極地は、完全な修行の後に初めて現はれるのであります。きびしく永い求道精進を是非必要といたします。だが、應分の立命ならば、求道し、修行しつゝある一歩〳〵に見出せはせぬかと思ひます。否、私は敢へてハツキリと申します、求道精進の過程が、直ちに安心の當所〳〵であると——。應分の開悟立命は、求道の脚下にあらねばなりません。大悟大覺を前途の目標としながらも、修道の一歩〳〵に、それ相應の安心はあるのであります。丁度、登山の目的は、山頂を極めるにあるにはしても、又、途中の、歩々に拓け行く展望にも快あると同じです。併し、大悟、大安心は、飽くまで、求道精進の後にあります。登山には、どうしても山頂に至らねば本當でありません。大悟のためには、絶ゆるなき求道が、如何にしても要ります。應分〳〵の立命に喜びを見出しつゝ、最後迄精進は續かねばなりません。

信仰に依る飛躍的安心があります。佛陀の大慈大悲に生きる安心立命は、永い求道の後の大悟にも等しくあります。大安心を獲んためにこそ、きびしく永い修行もいたすのです。若し幸ひに、さしたる修行に依ることなしに、絶對的信仰に安住なし得たなら、後は求道精進は全く要らなくなるのでせうか。かゝる輝しい大信仰に惠まるゝ人は、そう澤山はありますまいが、又、絶無とはいたしませんので、島渡問題になりそうですが、扨、答は至つて簡單であります。絶大な信仰に安住して後も、なほ精進求道は續くのであります、信仰前のそれと、信仰獲得のそれとには、氣持の上に異りがありますにはしても——。信仰によらざる、激しい難行精進のもたらした大悟の後にも亦、所謂悟後の精進があるのであります。自體、求道修行は純粋絶對のものであつて、少しでも何かの目的あつてするべきではありますまい。求道のための求道であります。修行のための修行であります。ですから思ひ切つて云へば、たとへ安心立命と雖も、これを求道の唯一の目的とするならば、第一義には外れるのであります。開悟や安心立命は目的として尊いものではあつても、これを一度目的と定める以上、目的を達する迄の求道なり修行となります

ので、開悟や安心の目的を實現すれば、あとは求道が要らぬとなります。目的に達する迄の、方便としての求道修行ではありません。ですから、尊くとも、目的を唯一の對象とする時不純の分子はおこつて來ます。云ふにも足らぬ愚目的に至つては、言葉を弄するまでもありません。求道は求道のためであります。人として當然のつとめであるに過ぎませぬ。信仰とて矢張りそうであります。佛陀の實在を信ずるのは、功德を目的として强いて信ずるのでは、決してありません。佛陀の實在、佛陀の慈悲は、信ずるも信ぜぬもない、足下の現實に過ぎぬのです。あるものを、たゞ、あると認むるのみなのであります。功德を得んとして、一心になつて信ずる程珍貴なものではありません。わかり切つてあるものですから、あると信ずるので、信ずるとは、わかりもしないもの、ありもしないものなどを强いて認めんとすることではありません。重ねて今一度申せば、求道は求道のため、信仰は信仰のため——であります。

人として當然の求道精進を續け、佛陀の實在を佛陀の實在として確信する時、こゝに、安心立命は自ら生じ、佛陀信仰の法悅歡喜は、防げども〳〵勢として湧きあがつて參り、どういたしやうもありません。目的としてこそ忌まはしかつた安心が、功德が、自然におこつて來るのであります。私は自然に湧いて來る功德を迄否定する者ではありません。これなら有難く拜受いたします。唯、無理な、不純な、功利的なそれを否定いたすのであります。清廉な求道、純粋な信仰には、無量の珍寶、求めざるに自ら得らるゝのであります。かくなれば已に、悟前の精進も、悟後の精進も無くあります。信前の修行も、信仰獲得後の修行もないのであります。一すちの求道、一いろの信仰があるばかりであります。

身延山御書の語る求道談には、求道のきびしさは說いてあつても、求道の後の大悟や勝利に就いては、餘り書いてありません。求道のための求道を示すために、殊更ら作意してそうしてあるのか否か、そこまでは判りませんが、或は皮を剝いで紙とする處に、或は飢たる虎のために身を與へる處に、或は乞眼婆羅門に眼をくじり取らせる處に、卽ち求道の當所に、苦しみの脚下に、已に〳〵勝利の法悅は現前いたして居るのであります。一面に於いて、勝利の喜び無くして何で二つとない身命を進んで捨てられませう。そして、この勝利に固定すること無しに、來ん世には、更に求道が始まらねばなりません。求道心無き人にのみ、苦しみはどこ迄も苦しみなので、求道者の境涯は到底忖り得べくもありますまい。道德程度の儒教でさへ、「朝に道を聞いて、夕に死すとも可なり」と申します。宗教者の求道には、それ以上のかがやかしい心境がなければなりません。行き行けど〳〵求道又求道、求道は果しなく進みます。求道の一歩〳〵に踏み拓かれて行く悟

境は、無限に展開して行きます。求道のための求道であります。信仰のための信仰であります。

五、

樂法梵士、雪山童子、常啼菩薩、藥王菩薩、其他の求道者はその殆ど全部が、過去世の人物か又は理想上の人々で、私共には實感が少ないかも判りません。その求道振りは、若干現實離れがいたして居るやうにも見えます。こう云ふ因緣談理想譚では、私共の求道生活の規範とすべく餘りにも緣遠いかの如くに存ぜられます。一にこゝのみに限らず、御書拜讀中にはこの種の物足りなさが數々おこつて參るのであります。併しです、これ等の例話に優るとも劣らぬ求道精進をなされて、「つく〳〵と憂き身の有樣を案ずるに、佛の法を求め給ひしに異らず」と述懷遊ばされた、日蓮上人の人格を通じて拜する時に、緣遠さや物足りなさはどこかへ去つて、皆生き生きとした話に變つて參ります。上人の人格を通さねば生きないのであります。因緣談であらうと、理想譚であらうと、事實これ等を身を以て體驗して、私共に示して下されたのですから、因緣談理想譚は日蓮上人に依つて、立派な事實談に置き替えられてゐるのです。これ等の話を、私共が直接に、ものゝ本に讀むならば、終に緣遠い話に終つて了はねばなりません。

今更ら云ふまでもなく、宗教は生ける人格を通さねばなりませぬ。身延山の自然も、日蓮上人の聖眼を通すればこそ、冒頭の如き莊嚴境となりました。過去世の因緣談も、日蓮上人の筆に依つてのみ生命が通つて參るのであります。生ける人格を通さざる話は、全く一場の理想に過ぎますまい。

六

身延山御書には

——實に佛になる道は、師に仕ふるには過ぎず。——世間の人の有樣を見るに、口には信心深き事を云ふといへども實に神にそむる人は千萬人に一人もなし。

——之を以て之を思ふに、樂しくして若干の財を布施すとも、信心弱くば、佛に成らん事叶ひ難し。縱ひ貧なりとも信心强うして、志深からんは、佛に成ん事疑ひあるべからず。

其他、私共の生活指針ともなるべき御言葉が數多く見られます。又、文末の聖詠たる

たちわたる身のうき雲もはれぬべし
たえの御法のわしの山かぜ

の一首に至つては、身延の自然につゝまれて、靜寂の裡につく〳〵と詠まれたものとして、無限の味ひを覺えます。身延山御書の一篇には、多大の感激が湧いて參ります。今は姑くその一二に就いて、とるにも足らぬ愚感を述べさせていたゞきました。

時感

惜道居士

熱し易く冷め易い人心をして眞に不動地に安住せしむるには、宗教の正しい信仰を與ふるに限る。困苦を甘受し、足るを知つて日常歡び、感謝の生活に精進するには正信なかるべからずである。

禁酒禁煙を叫ぶ婦人達の臺所には、大根の枯葉は捨てられてないだらうか、バナヽの皮が下バケツに投げ込まれてないだらうか。一品營養食を口にする前に、先づ精神上に覺醒を與へることである、日の丸辨當も結構血となり肉となる、否粟や稗を常食としても堂々たる體軀を備へて居るではないか。感謝の念なき人は美膳も素通りで三文の價値もあるまい。聖日蓮を學べ！

○　○

信仰が正信か迷信かは一つにその對象の如何にある。鰯の頭も信心からなどいふ言葉は、宗教を辨へない愚論である。或は宗教は自身にある、自己を深く見極めた時豁然として大悟徹底するといふやうな觀念論は、甚だ警戒すべき思想である。併し又客觀の佛にのみ縋る念佛の純他力宗も勿論正しいものではない。世の森羅萬象の關係が、そんなに純自力だ

とか、純他力だとか劃然と辨別さるべきものであるまい、どうしても法華の妙理でなくば解決されぬであらう。『行學の二道をはげみ候べし、行學絶へなば、佛法あるべからず』だ。

○　○

本多日生上人四十年御布教の根本道場であつた淺草統一閣奉安の大曼荼羅本尊が、何日しか井村日咸氏筆の、釋迦多寶二佛が、中央の南無妙法蓮華經と同大に改竄されたものと取換へられてしまつた。不可思議のことである、卽ち宗祖や先師の謹寫になつた　御本尊に嫌らずして井村氏の獨創に係るものを大衆に拜ませて居る、それを誰れ一人不思議がらぬことが不可思議である。

いろ〳〵申分もあらう、理窟づければ泥棒にもあるが、苟くも　本師釋尊の佛勅を奉じて圖顯遊ばした吾人信仰の正境に對して、猥りに私見を以て改竄する如き精神は、既に法の勝利を壞り失へるものであるまいか、獅子身中の蟲たる譏を免ること出來ない嘆ずべき大事である。宗祖云く『爰に日蓮いかなる不思議にて候らん、龍樹・天親等・天台・妙樂等だにも顯し給はざる大曼荼羅を、末法に入つて二百餘年の比はじめて法華弘道のはたじるしとして顯したてまつるなり、是れ全く日蓮が自作にあらず、多寶塔中の大牟尼世尊分身の諸佛すりかたぎたる本尊なり』と。

○　○

四十年來懸案であつた宗教團體法の原案が發表された、前後三回に亙つて議會提出は差控へられて居た、そこには本願寺やキリスト教の反對意向も災したとかいふが、彌〻今度こそ萬障を排して統制の實現に近づきつゝある。願くはこれが形態の上丈けでなく、漸次その教義上に於ても宗教の本質を審議し、假初にも不合理なもの、國體に悖るやうなものは斷然鐵槌を下し、皇國に合致せる明教を補助し擁護する時、國民精神は肅清され、眞に肇國の理想は顯現され、從つて世界の大なる喜を見るであらう。

○　○

宗教法案が成立すると否とに拘らず、在家の人人はモット宗教に對する常識を以て、その大要だけでも把み、よいお坊さんは護り立てるがよい、けれども其處邊の無爲徒養に遊戯し寺爭ひの墮落坊主には宜しく經濟封鎖を斷行することだ。お盆の月に棚經に廻る大坊主小坊主、五分十分のお經坊主には微塵もお布施の必要はない、寧しろそんなものを供養すれば共に惡道に墮つる者と覺悟することだ。佛教は駄目だ坊主は何をして居るといふより、志ある人は　釋尊の明教が興隆せないのは獨り坊さんの罪ばかりでない、自分等も寝ぼけて居るからといふ反省をされたいと思ふ。

記事

盂蘭盆精靈祭　日支事變第一周年の盂蘭盆會を迎え、七月九日午後二時より本部講堂に於て、山口、和賀、本郷等の諸師に依り、法華經の大善を以て各團員及び陣歿並に大水災殃死の諸精靈に回向を捧げ、追孝に擬した。本年は新盆の方が例年よりも多く、殊に小西日喜上人の梵音を親しく耳にすること出來なかつた事は、何としても淋しい感を强くした。法華經には、『世は皆牢固ならざること水沫泡焰の如し』とある。日蓮聖人は『今行末に於て一日片時も誰か命の數に入るべき、臨終已に今にありとは知りながら、我慢偏執名聞利養に著して妙法を唱へ奉らざらん事は、志の程無下にかひなし、さこそは皆成佛道の御法とは云ひながら、此人爭でか佛道にものうからざるべき』と仰せられて居る。

三時過より礒部常任理事は『最大の福音』と題して、清淨無雜の法華經本門壽量品の法味が、各靈位、別しては數十萬の支那戰死者にどれ程大福音であるかを懇說され、四時から小林一郎先生は『立正の本義』に就て、世人が立正の意義を自分丈け正しくして滿足顏せるを是正され、その本義を詳述され五時前大拍手をあびつゝ降壇された。

滿堂の大衆は、凌ぎよい今日の半日を極めて有意義に贖つた事を歡び合ひ、本團御供養の粗品を手にしつお別を名殘り惜し氣であつた。

幹部會　六月二十六日と七月二十四日に於て本團幹部會を會館に開催した。協議事項は布教上の事と、夏期勤行法話に關する件等であつた。

本尊診講座並に日曜日清集　例月の通りであるから割愛させて頂く。但し八月は休講、日曜日は毎週朝六時から勤行會が營まれる。又中旬には講習會が催さるゝであらう。

福島支部報

七月七日　午後七時より中村樣方にて支部月次例會を行ふ。礒部先生の御法話の題は『正しき信仰の價値』その內容左の如し。

『吾人はパンのみにて活きられず』とせるキリストの言の如く、吾人の精神生活の中樞には常に正しき信仰に依つて意義付けられる。而してそれは吾人の心より發する思考力、批判力の原動力として働くのである。物の事相を觀るにもその觀察の陰に信仰の潛むと潛まざるとでは大いなる開きを生ずる事に心せねばならぬ。卽ち法華經の正しい信仰は、吾人をして日常の行爲の上に絕對的價値を生ぜしめるのである。之が第一の價値である。

自己の周圍に關係なく自分のみが解脫の境地に急がんとする者は、佛敎では二乘と謂つて之を攻擊して居る。卽ち正しき信仰をする時は自己を立派にするのみならず、他人をも立派にする事が出來る。而して道義上、深い根底をなすもの之れが正しき信仰の第二の價値である。人が超人格の實在を信じて精神的の感應を得た時、そこに過を改め、よい事をするが故に、人類文化の向上を促がす、これが第三の價値である。現下の樣な時局下に於て吾人は信仰をして上述の樣な價値を充分に發揮せしめ、社會に大きな幸福を持ち來す樣に努力精進すべきであると。

團費誌料維持費及寄附金領收（自六月二十一日至七月二十日）

一金　參圓也　東京　竹內文治殿
一金　五圓也　千葉縣　山田平八殿
一金　參圓也　東京　鈴木二光殿
一金貳圓貳拾錢也　和歌山縣　乾　涼甫殿
一金五　拾錢也　東京　石井幸生殿
一金貳圓貳拾錢也　萩　石山　亮殿
一金　壹　圓也　神戶　倉藤喜一郎殿
一金壹圓五拾錢也　盛岡　田口公信殿
一金貳圓貳拾錢也　東京　川添道場殿
一金壹圓貳拾錢也　同　笠原花子殿
一金貳圓五拾錢也　同　鈴木英夫殿
一金貳圓五拾錢也　同　萩野慶三殿
一金　貳　圓也　同　平井章子殿
一金貳圓貳拾錢也　靜岡縣　桑原斌有殿
一金壹圓貳拾錢也　大阪　富田清子殿
一金貳圓貳拾錢也　山形縣　遠藤豐次郎殿
一金　壹　圓也　東京　越山雄四郎殿
一金壹圓貳拾貳錢也　同　櫻井惣右衛門殿
一金貳圓貳拾錢也　同　福原修殿
一金　拾　圓也　同　何某殿
一金　參　圓也　同　宇野博順殿
一金貳圓五拾錢也　同　橋本致吉殿
一金貳圓五拾錢也　同　中村美津殿
一金貳圓五拾錢也　同　中村與四郎殿
一金五　拾　圓也　同　中村美津殿
一金　七　圓也　東京　小峰豐子殿
一金　五　圓也　同　山田英二殿
一金　參　圓也　同　大原行道殿
一金貳圓五拾錢也　千葉縣　村田驥明殿
一金　五　圓也　岡山　須山茂三郎殿
一金　拾　圓也　東京　小林長次殿
一金　參　圓也　同　高木清隆殿
一金壹圓貳拾錢也　福岡縣　秋山照代殿
一金貳圓貳拾錢也　愛知縣　山本金太殿
一金貳圓四拾錢也　名古屋　坂野千代子殿
一金貳圓貳拾錢也　岡山縣　岡野コキヨ殿
一金　拾　圓也　山口縣　有吉市六殿
一金　拾　圓也　東京　大谷祐康殿
一金貳圓貳拾錢也　同　田中米吉殿
一金貳圓貳拾錢也　大阪　大越信吾殿

右雜有入帳仕候也

納作勝手これを以て領收證に換度候

財團法人統一團會計

優婆夷淨行法門經卷上

第十二套の六

僧祐錄云安公涼土異經附北涼錄

修行品第一

是の如く我聞きき、一時、佛、舍衞國、彌伽羅母弗婆羅園、歡喜殿中に住したまひき。是に於て　毗舍佉母、千五百の淸信の優婆夷と、佛所に來詣し、佛足を稽首し、却つて一面に住す。

爾の時に、佛、毗舍佉に告げたまはく、何の緣あつてか晨朝に而も來至するや。毗舍佉母、佛に白して言さく、世尊よ、已に如來先に略說したまふ所の甚深、難解無上の法を聞くに、名けて優婆夷淨行と曰ふ。惟だ願くは世尊よ、我等を哀愍して微妙の法相を廣演し分別したまへ。

佛　毗舍佉に告げたまはく、惡知識を捨てて善友に親近し供養すべき者には之を供養す

る、是を則ち名けて　優婆夷の淨行と爲す。父母を供養し、夫主に奉事し、兒息を瞻視するも亦淨行と名く。小罪に於て輕想を生ずること勿れ。作すべき所の者次第に之を作すも亦淨行と名く。常に布施を樂つて作法を修習し、親友を愛念するも亦淨行と名く。飲酒を遠離し、衆惡を爲さず、常に愛語を修ずるも亦淨行と名く。多聞にして技藝あり、善く威儀を學び、所聞を研尋して廢忘せしめざるも亦淨行と名く。恭敬、尊重、少欲、知足にして恩を受けては能く報ずるも淨行と名く。八法の動轉する所と爲らず、顏貌怡悅なるも亦淨行と名く。心に憂慼せず常に安隱を得、若し能く是の如く、一切退することなく衆務して休息するも亦淨行と名く。能く善法に於て懈怠を生ぜず、疾く無上解脫、涅槃を證するも亦淨行と名く。忍辱にして語に隨ひ沙門を樂見し、身行正直にして大蔭に猗るも亦淨行と名く。能く智火を以て煩惱を燒滅し、善法を具足し勇猛無退なるも亦淨行と名く。人を毀謗せず杖楚を行はず、善く諸根を護り心を攝して亂れざるも亦淨行と名く。直心にして貪らず、常に靜處を樂ひ、精勤し修習し永く退轉なきも亦淨行と名く。

佛　毗舍佉に告げたまはく、善く身心を調へ、常に靜處を樂ひ、欺誑を捨離し、正語を行じ、懶惰を厭離し樂ふて精進を行じ、善く諸根を攝して放逸ならしめず、意謙敬にして

貢高に持せず、常に忍辱を行じて瞋恚を生ぜず、自ら諍訟せず、善く衆を和合し、不覆藏を捨てて、覆地に住し、無義語を捨てて、義語に住し、邪命を捨てて、正命を自活し、善能く身を量つて飲食を受け、多求を樂はず、少欲に住し、剛强を捨てて調柔の地に住し、諛語を修習して鑑言を遠離し、不安樂を捨て安樂に處せよ。

佛　言はく、三大行有り、汝應に修行すべし、何をか三大行と名くる、一には大信心、二には大精進、三には大智慧なり。世尊よ、云何なるをか大信心となす。佛の言はく、大信心とは佛を信ずること是なり。佛は是れ　婆伽婆、阿羅訶、三藐三佛陀、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊なり、是を大信心と名づく。何をか大精進となす、若し能く中に於て精進行を成じ、一切の惡法を棄捨し遠離し、一切の善法は應に攝取すべし、善法の中に於て勇猛にして息まず是を大精進と名づく。何をか大智慧となす、若し人智慧の眼を以て生滅の法と　聖人の所度は無常苦盡なるを見れば、是を大智慧と名づく。是を則ち名けて三種の大行と爲す。

已に度して衆生を度し　已に脫して衆生を脫し、

已に覺して衆生を覺し　已に調へて衆生を調へ、
已に安じて衆生を安じ　已に導きて衆生を導き、
我れ已に涅槃を得て　衆生をして涅槃を得せしむ、
三界は火宅の如し　貪欲は泥網の如し、
一切之を滅斷して　菩提の道を證せん。

佛の言はく三善行を修して、一切法を滿ぜしむ、何をか謂つて三善行の法と爲す。一には身善行、二には口善行、三には意善行なり。此の三善行を滿せば、一切法をして滿ぜしむ。

修學品第二

優婆夷淨行法門經卷下

修學品第二之餘

瑞應品第三

爾の時に　世尊、毗舍佉に告げたまはく、譬へば大雨潤澤して一切人非人等皆充足を得、及び諸の草木亦生長を得るが如し、如來の法雨も亦復是の如し。善く一切の無量の衆生の得度すべき者を潤す。

優婆夷淨行法門經　畢

本多日生上人著書特價提供

		特價 送料共
聖語錄	改版	金壹圓八拾錢
法華經要義	賜天覽	金貳圓五拾錢
日蓮主義心髓	〃	金壹圓五拾錢
日蓮主義精要	〃	金貳圓九拾錢
眞理の基礎に樹つ佛教の信仰	〃	金拾五錢
法華經要品	〃	金五拾錢
日生上人レコード（四面）	〃	金參圓廿五錢
日蓮聖人	〃	金拾錢
本尊意識に就て	〃	金貳拾錢
釋尊の八相成道	〃	金貳拾錢
法華經の心髓	〃	金壹圓五拾錢
講話講演集 本多日生上人	特價 送料共	金壹圓七拾錢
勤行作法	〃	金拾錢
佛教の心髓	〃	金壹圓
河合陟明著 皇道と日蓮主義	定價 送料共	金壹圓

東京市小石川區音羽町六ノ十七
財團法人 統一團出版部
振替東京九四二〇番

月刊「教」誌
定價一冊 送料共
一ヶ年前金 送料共
金拾錢
金五厘
金壹圓貳拾錢

申込所 東京市小石川區音羽町六丁目 振替口座東京一〇九四〇番 「教」發行所

統一定價
一冊 金貳拾錢 送料壹錢
半ヶ年 金壹圓貳拾錢
一ヶ年 金貳圓貳拾錢 送料共

注意
▲御申込ハ總テ前金ノ事
▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可致候
▲御轉居ノ場合ハ必ズ新舊共直ニ御通知ノ事

昭和十三年七月廿七日印刷納本
昭和十三年八月一日發行
（第五百二十一號）

東京市小石川區音羽町六ノ十七
編輯兼發行人　磯部滿事
東京市四谷區內藤町一
印刷人　山田英二
東京市小石川區音羽町八ノ十一
印刷所　野島好文堂印刷所
電話牛込六九六六番

不許複製

東京市小石川區音羽町六ノ十七
發行所　財團法人　統一團
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番

目次

佛教の根本と其の應用（其四）……本多日生
開目鈔講話（第二十三講）……小林一郎
後諫手引草（上卷）……本妙院日珠
宣撫班を語る……八木沼丈夫
法定而國清……笹川日堂
記事
○本部團報　○福島支部報　○團費誌料寄附金及維持費領收

第四十三年　九月號

13/11-24